
～ ギー・ガ～

ルート・西

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ギー・ガ」

【Nコード】

N1789J

【作者名】

ルート・西

【あらすじ】

遺跡の上の炭鉱街「エコー」そこに住む炭鉱夫兼機械技師見習いの少年「ガン・アローン」はこの街唯一のT・Aトレス・アーム通称「デカブツ」を使用し、生計を立てながら街の人々と日々を過ごしていた。

ある日、「エコー」へと流れ着いた「鉄の塊」を見つけた事で、彼の住む世界は大きく変わって行く。

運命を変える巨大ロボット活劇物予定！

0・プロローグ(前書き)

0・プロローグ

静寂が支配する暗闇の世界。

この世界を鈍く照らす月の光、その上空、満月は厚い雲を照らす。

そして……

その厚い雲の一部を切り裂き、満月の世界へと三迅の風が飛び出す。

静寂と暗闇の世界は終わりを告げ、轟音と重火器の人工的な光が新たな支配者となる。

『目標、威嚇に心じず速度を緩めません』

『了解、引き続き威嚇射撃を繰り返すぞ。落とすなよ』

『了解』

新たな支配者となったのは天空を支配するには不釣り合いな鋼鉄の人型の形。

『くそ、しつこい!!』

一機は逃げ、残り二機がそれを追う形となっていた。

逃げる機体はその機体サイズには不釣り合いな「大型飛空ユニット

ト」を装備した黒の「T・A」《トレース・アーム》
特徴的なバイザー式のアイカメラとガトリング砲の右腕部マニピ
レータが逃げる者としては愚鈍なイメージを与える。

対して、追跡の二機はノッペリとした顔の無い頭部デザインと、
機体サイズの釣り合いの取れた「飛空ユニット」のスマートさが追
跡者としての不気味さを逃亡者に与えるには十分であろう。
武器もマシンガン式が一丁ずつである。

『ぬうつ！』

執拗なまでの追跡者の威嚇射撃に逃亡者は短い呻きをあげ、機体を
斜め上方に傾け、きりもみするような不自然な体制でガトリング砲
を追跡者に向かって発射した。

だが、攻撃は当たらずにただ追跡者の横を掠めただけ、ノッペリ
とした頭部を少し照らしただけであつた。

追跡者の動作に隙は無く。よく訓練をされた動きだった。

『艦は五分後に追いつくそうだ。合流まで威嚇を続ける』

『了解』

統率の取れた動きで追跡者達は威嚇射撃を続けながら距離を詰めて
ゆく。

「チッ」

コックピットの中で逃亡者は舌打ちをした。自機に規格の合っていない「大型飛空ユニット」を強制的に装着したのが逃亡の足枷になっていた。

だが、この「大型飛空ユニット」でなければ逃亡の意味はなさなかった。これではならなかったのだ。

（ここで、ここで捕らえられるわけにはいかない！？）

距離を詰めつつある追跡者に操縦管を介して自機のガトリング砲を
トレスグリップ トレス・アーム
追跡者に向け発砲する。

（くっ……）

やはりグリップが思いとっただけ自機の装備を後悔した。使い慣れた物よりも奴等のようなコントロールしやすいライフルのほうが逃亡には有利であったのではないかと……。

だが、すぐに頭を振る。最終的にこの機を選んだのは自分であり、これを否定することはこの逃亡の時までこの機を準備してくれた協力者達を冒涇することになる。

「スー……フウ」

短い深呼吸をひとつ吐いて考えを変えた。このガトリング砲は自身の使い馴らしてきたもつとも優秀な武装だ。当たればライフルよりも確実に仕止められる。この巨大さは敵を威圧できる。その証拠に、先程の発砲で距離は再び開いた。追跡者は注意を強めていることだろう。

ただ逃亡するだけならこのままこれを繰り返せばいけるだろう。
あとはタイミングを待って行動を起こせば良いだろう。

だが、恐らく後続はすぐに来るだろう。後続との合流は逃亡者の
目的は確実に果たせなくなる。

「・・・・・・・・・・」

背後の「大型飛空ユニット」に気を向ける。

（少し・・・・無茶をする。すまない）

『攻撃がありませんね』

『ふん、逃げられぬと観念したか。鑑との合流まであと少し、この
まま威嚇射撃を――』

逃亡者達は余裕を見せていた。ここまでくれば逃げることなど不可
能。鑑と合流し、この任務を終わらせ、酒でも飲んでやろうと軽く
考えていた。

だが、その余裕が明暗を別けた。

『！！？』

目標が突如こちらに突っ込んで来たのだ。

目標はガトリング砲を乱射し、追跡者側の動きのタイミングを完全に狂わし

『ウアアッ！？』

うち一機がガトリング砲の洗礼を真正面に受け、吹き飛び、爆発した。

『クソッ！？』

側で破壊された僚機を後目に距離を取ろうと「飛空ユニット」にパワーを入れる。

『ッ！？』

だが、思ったようなパワーは得られない。ディスプレイの片隅に赤く表示される文字に追跡者の背筋が凍る。「飛空ユニット」の破損だ。

——原因はなんだ？ ガトリング砲か？ 僚機の破片か？ 簡単な事に気づけなかったのか？

だが、そんな無駄な事を巡らせる余裕など、追跡者にあるはずも無かった。

『アッ』

ライフル乱射の隙も与えられず、追跡者は間の抜けた声を挙げる。完全に距離を詰めた逃亡者が手首部に収納されていたナイフ式小型

武装「トーチ・カッター」をコックピット部に突き立て、無数の火花が夜を照らしながら機体は仰け反り、その追跡者の機体を逃亡者は踏み台の如く蹴り落とした。

雲を捲き込む爆発を確認し、逃亡者は安堵の息を――

「……クツ」

吐く事はできなかった。

（……遅かった）

絶望的な感覚が沸き起こる。

雲間を突き破り、巨大な姿が目の前に現れる。

――飛甲艦・フリゲート級

「足止めには、役立ちましたね」

艦内ブリッジ。白いスーツに身を包んだオールバックの男が舌先に紅い飴玉を乗せながら気だるそうに言った。

「は、先行機はよくやってくれました」

「よく？ ああ、そうですね」

艦長の言葉にスーツの男は彼らには興味無さげに飴玉を口の中で転がし、薄ら笑いを浮かべた。

「さ、そんなことよりもさっさと目の前のアレを捕らえなさい」

パンパンと両手を叩いて男が促す。

「は、トラビス隊を発進させる!!」

「あ、コックピットは間違っても傷付けないうでください」

——パイロットに興味はありませんがねフッフ。

「クツツ!!」

無駄と解りつつも逃亡者は距離を取ろうと動く、出来るだけ遠くに、希望はまだあると信じ。

だが、すぐに新たな追跡機が追いついてくる。数も先程の比ではない。

先程の隙を突いた奇襲は使えそうにはなかった。

追跡機が距離を詰めてくる。

（俺は、俺は）

「大型飛空ユニット」に一瞬、気に向け、グリップに力を込める。

（こんなところで！）

「諦めるわけには、行かないんだああアッ！！」

ガトリング砲を乱射する。だが、それは虚しく外れる。

（あと少し、あと少しなんだよ！）

彼が望みを託す場所がすぐそこにある。

——叶わないのか、あそこまで、望みは届かないのか。

「！！！？」

ドウウツ！！ と、彼の目の前で突如轟音が響いた。

「何事だ！！」

「か、下方向からの攻撃です！？」

「下方向からだと！！！？」

通信士の報告に艦長の怒声が飛ぶ。

「なぜ気付かなかった！！」

「お、恐らく、こちらのレーダー網の穴を抜けて来たものと！？」

「レーダー網の穴だと!？」

「界賊どもがよく使う戦法であります」

「か、界族だと!?!？」

報告をいちいちリピートする艦長をスーツの男は冷やややかな視線を向けながら飴玉を転がす。

(無能どもめ。界族対策のひとつもできないとは)

外の画像を眺める。界族の攻撃により、出撃した隊の戦列が乱れ始めていた。これは逃亡者にとってチャンスとなるのではないだろうか。

「艦長。艦を目標まで前進させなさい。突撃です」

「は? いや、しかし、前方にはまだ――」

「かまいません。多少の損害など構うことは無いでしょう? 目標を逃すわけにはいきません」

スーツの男は艦長の言葉に聞く耳を持たなかった。

「さあ、三度目はありません。前進するのです」

（なんだ？ 攻撃？ 味方、なのか？）

下方向からの砲撃により前方の追跡機達が散々となる。味方にせよ味方では無いにせよ、これは彼にとってチャンスとなった。

（今なら、行ける！）

「大型飛空ユニット」のパワーを上げる。

敵機も後を追おうとするが下方向からの砲撃に思うようにはいかなかった。

（いける。いけるぞ！！）

下方向からの砲撃者に感謝しながら目的の場所を目指した。

「！？ 前の気流の流れが変わっている。あそこか！！」

空の気流の流れが適度に変わる場所があると昔から何度も聞かされてきた。ここを通過して昔の冒険者達は移動を繰り返したという。

（あれに、あれに乗れば、逃げきれ——）

頼みの綱がすぐそばにある。どこに飛ばされるか解らないが、ここを切り抜ける救世の手。

「クッソオオオ！！？」

背後で巨大な飛甲艦が迫ってくるのが解った。味方を弾き飛ばし、砲撃をもともせず突っ込んでくる。

——ダメだ。間に合わない。このままでは間に合わない。俺は、間に合わない。

彼は覚悟を決めた。そして、ある動作を入力し、逃亡を止めて艦を見据えた。

（すまない。俺は、これ以上いけそうにない。もっと、いろんな事を教えたかった）

ガシャンと「大型飛空ユニット」とT・Aを繋ぐジョイントの一部が外れる。

（ここからさきは、どこにたどり着くか解らないけど。目的を遂げてくれ……。そして、君は、君の世界を見つけるんだ!!）

「大型飛空ユニット」とT・Aが瞬間的に離れ、別々の方向に跳んだ。

「世界を生きろ！リタ！！」

彼は決意を秘めた形相でグリップを握り、突撃してくる飛甲艦に向けてガトリング砲を全開にまでフル稼働させて特攻を開始した。

「テラアアアッ！！！！」

この突撃が飛甲艦にいかほどのダメージを与えるものか？

数機の機銃を破壊したのみで、彼の生は爆音と共に終わりを告げた。

だが、彼の目的の半分は達成された。

大型飛空ユニットが気流に吸い込まれて行くのをスーツの男は艦内から見つめていた。

（なるほど、「姫君」はあの中に）

簡易的な脱出ポッドへと改造していた。そのための「大型飛空ユニット」

男は奥歯で飴玉を噛み砕き、気流の先を眺める。

（すぐにでも追いかけていたところですが、この微量なダメージだと恐らく）

気流内での満足な飛行は不可能であろう。今は姿を消した界族の下方向からの砲撃と、彼の特攻がこの事態を生んだ。

「艦長。ここは帰還しましょう」

「は？ よろしいのですか？」

「ええ、あの気流がどこに運ばれるかさえ解れば良いのです。無理をする必要などはありません」

「は、全機に帰還命令だ！」

（そうです。無理をして私が死んでは意味がない）

男はほくそ笑んで新たな飴玉を口に放り込む。

（フフ、ハハ。この手に「妖精の姫君」を必ず）

男は心で笑いながら飴玉を転がした。

1・遺跡の炭鉱街「エコー」

炭鉱街「エコー」

かつての歴史を伝える遺跡の上にある珍しき街。

だが、遺跡と言っても既に学術的な価値は無いという。

今は一部の学者が定期的に街を訪れては何か記録をまとめる程度であり、住人達にとっては昔からそこにある存在なのだ。自分達の生活を支えてくれるものであり、街のシンボルでもあり、誇りなのだ。

遺跡の中には昔の人間達作り上げた空洞の中に生活燃料となる「デイーラ鉱石」が取れると知ったその次の時代の人間達がその上にトロツコ等の線路を築き上げた人工の色が強いものとなっている。

この「デイーラ鉱石」によって街は潤い、少しずつの繁栄を築いていった。何代にも渡る先祖達の教え、線路の修理と先祖達の築いたエリア以外は極力広げない事を守り、人々は少々便利な新しい文明の力の恩恵と少々不便だが歴史が裏打ちする伝統という名の技術を上手く共存させながら住人達は今日という生きているのだ。

ある学者曰く、この街に生きる人々こそが歴史を繋げる遺産なのだと言う。

そして、ここにひとり、遺産の一部ともいえる少年がこの街で生活をしている。

少年の名は

〃〃ガン・アローン〃〃

「どいてどいて！ 退いてくれ！！」

少年が旧式のオンボロバイクを運転しながら街の大通りを早歩き程度のスピードで進んで行く。後ろには荷台を付け、その中には使い込まれた工具類や、予備燃料、弁当等、その他諸々が詰め込まれていた。

「なんだ、ガン！ 今ごろ仕事か！！ 重役出勤てやつか！」

顔馴染みの声が人の倍はでかい親父から軽い挨拶がわりの野次が飛ぶ。

「勘弁してよおっちゃん。俺も好きで遅れてるわけじゃ無いのよ。今日は特別」

通り過ぎながらガンも軽い挨拶がわりの反論を口にした。

「へ！ 特別ななんて言葉は一人前のセリフだ！！ まだまだ声の高いひよっこが言うことじゃねえ！ 「デカブツ」動かすだけが才能じゃねえぞガン！！」

既に後方にも関わらず、親父の言葉はガンの耳によく通った。

「ウへ、相変わらず凄い言われよう」

自身のコンプレックスと痛いところを突かれた言葉に肩を竦めながらガンは仕事場の炭鉱場へと急いだ。

「あら、おはようガンちゃん。はい、これ」

途中、商店のおばちゃんからサンドウィッチを投げ渡される。

「サンキユ。愛してるよおばちゃん」

それを片手でキャッチするとすぐさま口につっ込み硬貨をおばちゃんに放り投げた。

「まいど！ 気を付けてねガンちゃん」

おばちゃんも上手くそれをキャッチすると手を降って見送る。ガンも片手を軽く振り返す。

（ん？ 今日は良いトマトとチーズが入ったんだな）

モゴモゴと口を動かし器用に食事を済ませ、いつもの朝の日課を全て完了すると今度こそ仕事場へと急いだ。

「おう！ 待ってたぜガン」

炭鉱場に着くと世話になっている親方が手を挙げて出迎えてくれた。

「すみません親方。遅れちまって」

バイクを止めながらガンは頭を下げた。

「ガハハ、おめえ今日は休みのはずだったかな。こつちが無理言っただ。仕方ねえよ」

親方は豪快に笑いながらガンの肩を叩いた。

「テテ、そう言ってくれると助かるっす。それで、今日の仕事はアレっすか？」

ガンは肩を押さえながら今日の仕事の内容を尋ねた。

「ああ、それに関しては事務所で話そうや」

「うす」

親方に促されて事務所という名のボロ小屋へと向かった。

「それでよガン。仕事に関してなんだが」

親方がほとんど白湯に近い出廻らしのお茶を出しながら仕事の話を進める。

「少々、エリアの拡大をしないとなんねえ」

「エリアの拡大っすか！ こりやまたすっげえデカイ仕事っすね」

ガンは自分の予想とは違った。大きな仕事に少し興奮の色を見せた。

炭鉱のエリア拡大はとても重要な仕事であり、ガンが生まれてからまだ一度も行われていない。前回行われたのは三十年近く前だと聞いている。

「ああ、まだ仕事始めて二年目のおめえにやらせるには少し酷なんだがな」

親方が白湯茶を少し口にして一息吐く

「俺達には「デカブツ」を操縦できねえからなあ。アレを使えるのは死んだボンのじっさまと跡継ぎのおめえだけだかな」

親方は肩を落とし頭を掻いた。

「今回は結構ヤバイところやるんすか？」

親方の様子を見て、ガンはすぐにそういう事だと取った。そして、それは当たっているようだ。

「ああ、今回は「デカブツ」があるから掘り進んでみようてことになってな・・・おりゃ反対したんだが」

なるほどガンは思った。確かに、使える物があるのならそういう結論に達するのはなんら不思議な事では無かった。

「本当、こんな重要な事を当日に言って申し訳ねえ」

親方が頭を下げる。ギリギリまで言い出せなかった自分を責めてい

るように見えた。

「よしてくれよ親方」

ガンは頭を上げてよと親方に言う。

そして笑って言った。

「どうせ二、三回はやらなきゃいけない仕事だ。早いうちに体験できて逆にラッキーだ」

「すまねえ、そう言ってくれるか」

「だからやめてくれって、俺は嬉しいんだからさ。興奮してんだよ。本当の意味でじいちゃんの仕事を継いだって」

またも頭を下げようとする親方にガンは興奮してることをアピールしながら止めさせた。

「で、すぐに取り掛かれるんす？」

「いや、事が事だかな。まだ、ちょっと時間が掛かる。作業前の儀式もやんなきゃなんねえし」

作業前の儀式とはエリア拡大の際に執り行う。先人達に感謝と謝罪

を捧げる儀式である。

感謝とは自分達が生活出来ることへの。謝罪とは、自分達の生活の為に遺跡を切り崩すことへの。必ず、欠かしてはならない重要な儀式だ。もちろん、三十年振りの儀式であるが、ゆうに一時間は超える大掛かりな儀式だそうだ。

「そっか、あ、だったらその間の仕事は無いんすか？ 雑用でもいいんすけど？」

まだ出番が無いことを知ったガンは他の仕事を聞いてみた。恐らく「デカブツ」の最終チェックは機械技師の先輩達がいつも通りにやってくれるのだろう。本当は自分も立ち会わなければならないのだが、こういう事は決まり事があるらしく。技師としては一年にもみたないガンにはまだ早いらしかった。だが、性格上このままジツとは出来ないわけで。

親方もそれをくみ取ってくれたらしく、ガンの興味のありそうな仕事を持ち掛けた。

「んじゃ、「宝探し」でも手伝うか？」

「「宝探し」て事は」

「ああ、ひっさしぶりに「気流」でいろんなんが流れ着いたわけよ」

「絶対やる！！」

ガンは先程とは違う興奮を身体に感じていた。

親方の言う「宝探し」とは、遺跡近辺に「気流」と人々から呼ばれている不可思議な現象に乗って漂流してくる鉄屑等を拾い集める仕事である。

その大半が、価値の無いガラクタである事が多いが、中にはとてもないお宝と呼ばれるものを引き当てることも少なくは無いのだ。この「エコー」付近では取れない珍しい金属等は特に価値が高いのだ。

まるで違う世界をそのお宝から垣間見る事が出来る。「気流」と呼ばれるこの現象がなぜ起こり、何処で現れるのかこの住人達はよく解ってはいない。ただ、教科書的な意味で解っている事は、この世にはこのことは違う世界が少なくとも三つはあり、「気流」はそれに関係のある現象であること。そして、信じられない事にこの「気流」を使つて世界を渡る人間達がいるらしい。まるで渡り鳥のようなその人種の事を人々は世界を荒らしかねない意味を込めて「界族」と呼ぶという。

「界族」と呼ばれる人種の多くは「気流」を一番理解している世界の人間が多いと伝え聞く。

が、そんなことはこの住人にとってはどうでもよいことなのだ。正直、自分達の世界がどういったものかも解つてもいないのにピンと来るわけがない。

ただ、みじかに起きている「気流」という存在は理解できていた。彼らにとって「気流」とは物を運んでくる現象以外のなにものでもない。もうひとつの生活の潤いだ。実際、「気流」から送られてきた潤いを与えた物のひとつがT・Aの残骸だトレス・アームった。

これが送られてきた時、当時の技師達は驚いた。残骸が送られてくる少し前に、エリア拡大の作業の際に、コレと同じようなものが偶然発見されたのだ。

処分を検討していた関係者達は技師達の興味という名の探求心に折れて、技師達はそれに答えるように残骸からの情報をスポンジのように吸収し、独学で自分達のものにしていきその結果、作業機械等の技術が向上し、更なる生活の安定と現場の人間の安全の強化へと繋がっていったのだ。

と、こんな事がこの街の文献には記されているのだ。

「長つたらしいご託よりも今は早く行きてえよ。俺が良いの見つけたら物によっちゃもらっていいっすよね？」

「ああ、考えとこうか」

「うし、ほんじゃ大仕事前の稼ぎと行きますか！」

パンパン！ と、ガンは顔を叩いて気合いを入れ、「気流」の流れ場へと親方と共に向かった。

——「気流」の流れ場

「おう、調子はどうだ！」

親方は流れ場で先に「宝探し」をしている作業員に大声で作業の調子を聞いた。

「だめだ親方！ 今回はいまんとこあんま良いもんねえよ！
線路の補強材足しになりやいい程度だ！」

作業員のひとりが同じくらいの大声で現段階の結果を報告をする。

「そつか！ 無駄足になりそつか！！」

「まだ奥まで行かねえとわかんねえけど！ 作業ウオーカーでも使わなきゃきつちいよ！！」

親方は一通りの報告を聞くと少し悩んだ。

「ん、この様子じゃお宝の期待は持てそうにねえな。作業ウオーカー使うにしても下手したらメンテナンスと燃料代の一日分がパーかあ」

「親方！ まさか可能性があるのにやらねえって言わないよな！！」

「ん、いや、まだそうとは言ってねえよガン。ただ親方としての俺の立場からちよつと勘定を叩いちまっただけよ」

「でも、その言い方だとやらねえって事も考えてんだろ？ なあ、俺の給料からメンテナンスと燃料代払ってもいいからさあ、やろうぜ」

「・・・・・・・・・・」

ガンは奥の「宝探し」をどうしてもやりたいうだった。親方は考えた。

ガンにはエリア拡大の仕事が待っている。その前にモチベーションを上げてやるのも大事なのではないかと。

「おっし、んじゃやるかガン！」

「さすが親方！　そうこなくっちゃー！」

親方の決定にガンは手を叩いて喜んだ。

「あ、そうだ親方」

「あん？」

「あのさ、燃料代は俺の持ちなんだからさ」

ガンはもうちょっとだけ調子に乗って親方にワガママを言ってみた。

「おい、ガン。頼むから壊すなよ？」

「心配しなくても大丈夫。俺の操縦テクを信じなさいよ」

ガンはいま作業ウオーカーの座席の上にいた。特に心配していない表情で挨拶がわりの悪態を吐く作業員達をいなしながら最終チェックをする。

「えーと、燃料計はOK。アームはペンチ型なのね。ま、使い方次第では固定するのに便利だよな。一応、ショルダーに丸のチェー

ンソーでも……」

「おし、準備オツケー！」

「出すぞっ！ ガン！」

「いらっしやいよ！」

作業ウオーカーで合図を送り、作業員が開閉バルブを回した。錆の強い扉がギチギチと音を起てて開き、ガンは再度座席を固定し直し、流れ場へと飛び出した。

「相変わらず、ここ足場わりい」

「気流」の流れ場を進みながら久しぶりに感じる足場のデコボコさにガンは軽く愚痴ってみた。

ボコボコと岩が折り重なった地形は進めば進むほどひどくなり、やがて人間の足では先には行けそうに無いほどの溝が見えてくる。たまにこの溝の中にお宝が挟まっていることもあるのだが

「と、何も無しか。ま、ここら辺まではみんなも来てるよなつ、と
！」

一応の確認をした後、慣れた手つきでレバーを強く握りペダルを軽くタタンと踏み作業ウォーカーをホバリングさせて溝の反対側へと着地した。

「よしよし、こっからこっから。待ってるお宝ちゃん」

ガンは軽く上唇を舐めるとアームをガチガチと動かしながら前へと進んだ。

「んん、目新しいもんがねえなあ」

しばらく前進しながらたびたびアームで岩をほじくり返してみたが、お宝と呼べそうな物は無かった。それどころか進めば進む程に、漂流物は少なくなってきた。

（今回は入り口付近に固まって落ちたのか？）

そんな結論が頭に出てくる。

結局、無駄足だったかなあとはいつつもガンは前に進んでいく。

「ありや、ここまでか？」

ついには目の前にデコボコとした岩の壁が立ちはだかった。

「ん、風の音は上からするよなあ。あの上、入れなくはないか」
座席カバーを開けて外の空気を肌で感じてみると、上からヒューヒューと風の音が微かに聞こえてくる。手製の双眼鏡を通してみると空洞があるのもわかった。

「ところどころに岩のでっぱりあり、ホバリングしてやればやってやれないことはない」

ブツブツひとり呟いてからガンは感度最悪の通信機の電源を入れた。

『お・・・ガ・・・ど・・・した!』

ガガガと、ノイズ混じりの最悪の状態で通じ、向こうからは親方の声が聞こえた。

「親方、そっち聞こえるか!」

最悪な感度のせいかな自然に声が大きくなってしまっ。

『お・・・お!..!』

それは向こうも同じようだ。

「気になる所あつから! そこみてから引き返す!..!」

『ああ! な・・・だつて!..!』

「気に! なる! とこ! みて! 帰る!..!」

『おお！・・・かった！・・・き・・・つけ・・・よ！！』

「うす！！」

とりあえず向こうにこちらの異図が伝わったのを確認してノイズのうるさい通信を切った。

「よし、行くぞ！！」

ガンはペダルをタタンと踏んだ。作業ウオーカーがホバリングを開始する。順調に最初のでっぱりに到達する。

（よしよし、我ながら順調だ）

休む間もなくまたホバリング。これを何度も繰り返す。

「オッ、トッ！？」

途中、六段目のでっぱりが少し崩れ、バランスを崩しかけるがすぐに持ち直し、その後は順調に上を目指して行けた。

そして

「よしっ、と！！」

頂上へと到達した。

「おー、高い高い。でも、眺めはよし」

自分の通ってきた道筋を見下ろしながら、ガンは率直な感想を漏らした。

（さて、この先にお宝ちゃんはあるかな？）

頂上の先はまだ少し行けるようだった。ガンは上唇を舐めて前へと進む。

（お、この先は広いぞ）

しばらく進むと拓けた場所へと到達した。上空を見上げるといつもより空が近くに見えた。

（さてさて、ここがほんとの行き止まりっぽいけど？）

辺りを見回してみる。珍しい物は特に見当たらないようだ。

「んん？」

が、一ヶ所だけ不自然な形の岩の塊を見つけた。

ガンが近づいてじっくり見てみるとやはり何か不自然な形だ。なにか、上から降った岩がキレイに降り積もったように見え無くもない。

（これは、もしかしたらのものかしって！）

ガンは少し興奮しながら、岩を一つアームで搦んでみた。簡単に取れる。次の岩を取り除いてみる。

「おっ！」

その下に明らかに岩とは違う銀色が見える。

（鉄だ！）

逸る気持ちを抑えつつ残りの岩も慎重に取り除き、その銀色をゆつくりと引きずり出す。

「すげえ、マジのお宝だ!？」

それは一見するとボコボコにへしゃげたただの鉄の塊にしか見えなかった。が、よくよく見てみると後ろ側の形は噴射ノズルにも見えなくはないし、横にも引きちぎれた翼のような跡が見てとれる。

これは空を飛ぶための物ではないかとガンは思った。

「これ、持って帰っちゃったらもしかしたら俺達、空飛べちゃうのかな!？」

まだこの街には空を飛ぶ技術はない。だが、これがあればもしかしたら。そう考えたら気持ちの高ぶりを抑え切れなくなってきた。

（なにがなんでも持って帰る!!）

と、決めたものの。引きずり出すのがやっとだったコレをあの一瞬の隙から降ろすのは困難といえた。

（ちょっと勿体無いけど、少し解体していくか）

幸い、念のためにと取り付けて来た丸形チェーンソーがある。ガンは何処か解体しても問題ない場所を調べてみた。

ガンガンと表面を軽く横に叩いてみた。

（ん?）

なにか違和感を感じて再び叩いてみる。
ガンガンから途中グォングォンと言う音に変わる。

「中が空洞なのか？」

——ここになにかあるのか？

自身の好奇心に負けたガンはそこをこじ開けてみることにした。

丸型チェーンソーの刃をゆっくりと入れる。火花が散り、徐々にその場所が真っ赤になる。少しするとアームの爪が入る程の穴が開く。

そこにアームを突っ込み、ギチギチと引き剥がす。途中何度か刃を入れて完全に開けることが出来た。

「なんだこりゃ？」

そこにはなにか銀色の箱のような物がキレイに収まっていた。ひと一人が入り込めそうな大きさがなんだか棺のようにも見えて不気味に思えた。

（なんだ、この赤いの？）

横に赤く光るランプが見えた。ガンはアームの先でそれを突っついてみると、ランプは赤から青に切り替わる。

「な、なんだ!？」

突如、目の前の箱から機械音が響き、箱の一部が緩やかにスライド

する。

「ひ、開い、て……!?!」

ガンはいま自分の目の前で起こった事に驚愕し、言葉が出なかった。

あるはずがない、こんなことがあるはずがない。

（人が……ああ）

目の前の銀色の箱の中身。人がいるそれも年端のいかない小柄な少女がそこにいた。

ガンは作業ウォーカーのカバーを開く。キズだらけの強化ガラス越しからクリアな肉眼が少女の姿を映し出す。

ガンはジッと少女を見つめる。

「し、死んでるのか?」

少女はピクリとも動かず瞳を閉じている。透き通るような肌の白さが生死の判断を鈍らせる。

白に近く光輝く銀色の長髪が彫像物のような錯覚も覚えてしまう。だが、肌の柔らかさを感じさせる質感が彼女が血の通った人間であると確認できた。

よく見ると唇が少し朱色がかっている。生きていると言っ証拠だ。少しずつ安堵感がガンの中で広がっていく。それと同時に違うなにかが彼の中で沸き上がってくる。

固定ベルトを外し、身を乗り出す。この少女を瞳の外に外すことが出来なかった。

（ああ、なんか服だけがなんかボロボロだ・・・綺麗なのに）

妙な事を考えてしまう。どこか心がフワフワとした感覚。

ジッと見つめるガンに少女は何も応えてくれない。

いや

（！！？）

少女の瞳が薄く開いていく焦点が合わせられないのか。その瞳はさ迷い、そっと、ガンを映した。

「・・・あ」

ガンは痺れるような感覚に襲われた。少女の瞳の色はとても独特で、薄い、「紫」だった。

だが、色に怖さは感じない。もっと別のなにか・・・そう、新しい魔法に掛かった。そんな感覚。

少女の唇が少し動いた。とても微かな、掠れた声が耳に届く

少女はこう言った。

——テ・・・リー

と

そして、少女は再び瞳を閉じた。

ガンはストンと身体を座席に埋めて、ゆっくりと片手を通信機のスイッチを押した。

無意識に、このままではいけないと思った行動。

『お．．．した．．．ガン！』

「．．．．．親方」

『お．．．．．！！』

「女の子だ．．．．」

——テ．．．．．リー．．．．．見て．．．．．くれた．．．．．夕．．．．．を

2・紫の瞳の「少女」――

――・・・・・・・・――

「・・・・・・・・・・」

少女は眠る。艶やかに輝く白に近い銀色の髪と透き通るような白い肌をした儚くも美しい彫像品と錯覚させる少女は眠る。

彼女が眠っているのは冷たい鉄の箱の中か？

否、彼女がいま眠る場所は暖かな白いベッドの上。微かに伝わる寢息。どんな夢を彼女は見ているのだろうか？ いや、夢は見えていないのかも知れない？

少女を側で見守る少年が一人。

彼の名は「ガン・アーロン」

少女を見つけ、保護した少年。

生活燃料の灯りに照らされて眠る少女の綺麗な横顔をガンはずっ

と眺めていた。

流れ場で見つけた時、少しだけ目を開けてガンを焦点の合わない瞳で見つめてから、少女は一度もその瞳を開けてはいない。

（俺、どうしたんだ？）

ガンは心の中が妙だとずっと感じていた。

この少女の瞳の色が忘れられない。見たことの無い、薄い紫色。初めて、人の目の色が綺麗だと思った。

この感じはなんだ？ ワクワクする好奇心？ …… なんか違う気がする。

胸の奥の奥が、モヤモヤしてたまらない。 たまらないんだよ…
…。

頭の中で同じことをグルグルと考える。 その中で一度も消えない紫色。 目を話したくない少女の横顔。

「おい、ガン」

心の中で自問を繰り返していたガンの耳に、親方の声が届く。

「うちのかみさんが作ったコーンスープだが、食えっか？」

親方がマグカップを二つ差し出す。暖かい湯気とスープの香りが鼻孔を撥る。

「いただきます」

コーンスープを受け取りひとつを灯り台の上に置く。

ガンは少しだけコーンスープを口にした。身体に暖かさが染み渡る。なんだか、久しぶりの食事のような気がした。それほど時間は経ってないはずなのに。

「すみません親方。部屋を貸してくれて食事まで」

「ハハ！ 今更だ。遠慮なんてしてんじゃねえ」

親方は笑ってガンの頭をクシャクシャにした。

「テテ、痛いよ親方」

「しけた面してっからだ。いつものガンらしく笑っつけ」

そう言っつて親方は二カツと歯茎を剥き出しにして笑った。意外と良い歯並びと若干の酒臭い息にガンは思わず笑う。

「俺、こんな変な顔しねえよ」

「なま言っつてんじゃねえ」

「テッ！！」

頭を叩かれてコーンスープを溢しそうになりながら、二人で笑いあった。

「嬢ちゃんはまだ目が覚めねえか」

「うん」

「おめえがこの嬢ちゃんを連れて戻ってきた時は驚いたってもんじやなかったがよ」

親方はその時の様子を思い出す。

作業ウオーカーからこの目の前の少女を抱えて飛び降りてきたガンの別人のような表情にその場にいた全員は二重に驚き、ただ事の無さを感じた。

そして、ガンの様子のおかしさと、「デカブツ」の調子が上がらないという報告を受けて、エリア拡大作業の中止を決定し、少女を休められる一番近い場所という事で親方の家まで連れてきて今に至っていた。

今はガンの調子のおかしさも大分和らいでいるように見えた。

時折、呆けた表情で少女を見つめているようではあるが。

「なあ、親方。俺、今まで違う世界があって別の人がいるってピンとこなかったけどさ」

不意にガンはそんな事を聞いてきたので親方はガンの言葉に耳を傾

けた。ガンは話しを続ける。

「本当に、いるのかも知んねえって思ったよ」

「この嬢ちゃんがそうだったのか？」

「うん、髪の毛も、目の色も、俺達とは違うし」

——それに、とても、綺麗な雰囲気だ。

「あれ、俺やっぱりなんかおかしいのかな？」

親方と話して落ち着いてたのに、また、なんだか妙な気分になって、
凄く……たまらない。

「お、おい、大丈夫かガン？ お前もちと横になった方が」

「……うん」

心配してくれる親方の声に、少女から離れたくない名残惜しさを感じながら立ち上がろうとする。

「え？」

その時、手を誰かが握る感触をガンは感じた。少し冷たい手の感触を。

ガンは驚いて自分の手を見る。

細い指先が布団の間からガンの指を握っていた。

少女の顔を見る。

ゆっくりと瞼が上がり、唇を少しだけ動かし寝ぼけたような表情で、ガンを、薄い紫色の瞳で見上げていた。

「・・・・・・・・・・あ」

今度は焦点の合った瞳でこちらを見据えている。

ゴクリとガンは唾を呑み込んだ。動けない。いや、動きたくない。彼女の言葉をガンは待った。

親方が慌てて奥さん呼びに階段を駆け降りていくのにも気付かなかった。

ただ、少女の言葉を待つ。

「・・・・・・・・テ」

少女がゆっくりと口を開いた。ガンは危機漏らすまいと、耳を近付けた。

「・・・・・・・・リー？」

（テリー？）

人の名前だろうか？流れ場で少女が呟いた言葉も「テリー」だった

気がする。

少女に近しい人の名前だろうか？

「・・・・・・・・・・違う」

目を瞬かせ、少女はそう呟くと、小指を手から離れた。

「あ・・・・・・・・」

少し暗くなった少女の表情と、離れていく指の感触にガンはなぜか寂しさを感じた。

「テリーじゃない・・・・・・・・似てるけど・・・・・・・・違う・・・・・・・・ひと」

掠れ気味な声で呟く寂しげなその声に、ガンはなにも言えなかった。

少し間を置いてなんとか出せた言葉は

「お、起きあがれる？」

だった。

「・・・・・・・・ん」

少女は弱く頷くと、ゆっくりとした動作で起き上がり

「テリーは・・・・・・・・いない」

と、瞳を閉じて呟いた。

（テリーって誰？）

とは、なぜか聞けなかった。とても気になるが聞けなかった。少女の悲しげな雰囲気から、聞けはしなかった。

代わりに、ガンは灯り台の上のマグカップを持って

「飲める？」

少女に差し出した。

「……」

少女は黙ってガンの顔とマグカップを交互に見て

「……ん」

受け取り、コーンスープを口にした。

「おい……おいしい」

少女は暖かいコーンスープの湯気を見ながら呟いた。

「あたりまえだろ？ あたしが作ったんだから」

急にそんな声が後ろからした。

「あ、親方。おかみさん」

いつの間にか、親方夫婦が後ろにいたようだ。

「いつからそこに？」

「コーンスープを渡すところからかね？」

「言ってくれば」

「お邪魔かと気を使ってやったんだよ」

なんのお邪魔だ？ と、ガンは思ったがおかみさんは、返事を聞く前に、ズイツと少女に近づくと。

「動けるかい？ ダルいとか吐き気とかは？」

少女の体の調子を聞いてきた。

「ん・・・それは・・・無い」

コクリと少女は頷いた。

「そうかい。よかった」

おかみさんはフウッと息を吐くと今度はガンと親方の方を向いて

「さ、男共は出てっておくれ」

といってグイグイと扉へと追いやっていく。

「ちょ、へ？」

「なんで俺達が出てかにやなんねんだ？」

不満を漏らす二人におかみさんは舌打ちをして二人にピシヤリと言った。

「なんだいスケベ共だね。あんな女の子の着替えがみたいってのかい！」

どうやら、おかみさんは彼女の常態をみて汗を掻いた衣服を替えようと思っただけらしい。

ガンと親方は顔を見合わせて

「失礼しました!？」

扉の外に急いで飛び出した。

「まったく、すぐに察するもんだろくに男共は」

腰に手を当てフンと鼻息ひとつに扉を少し睨んでから、少女の方に向き直る。

「ひとりで脱げるかい？」

視線を少女に合わせてニツと優しく笑って聞いた。

少女はゆっくりと頷くとマグカップを置いて脱ぐ準備をしようと

クゥゥ

した途端に少女のお腹が小さくなった。

「……………」

少女は声を漏らし、マグカップとおかみさんを交互に何度も見る。その様はまるでおあずけをくらった子犬のように見えて

「ぷふうっ」

おかみさんは思わず吹き出してしまった。

「アハハ、いいいいいよ、ゆっくりお飲みよ。あたしゃ、着替えでも用意しとくからさ。うん、あとでちゃんとした食事を用意しようね」

おかみさんはにこやかに笑いながらクローゼットへと歩いていった。

少女はしばらくおかみさんの背中を眺めてから、そっと、コーンスープの二口目を口につけた。

「……………」

「あー、よく考えたらあの年頃の女の子が着るような服がうちには無かったねえ」

クローゼットを漁りながらおかみさんは少し頭を抱えた。

服が無いわけではないのだ。かなりの妥協をすれば少しダボついてしまいがガンのために繕った服が何着かはあるのだが、ほとんど

仕事での使いやすさを重視しているので女の子にはあまりにもあまりなデザインなのだ。おかみさんとしてはあれだけ綺麗な顔立ちをしている少女には、自分の娘のような可愛らしい服を着せてやりたいと思う。かといって、娘の口口ナはまだよつになったばかり、着れるわけがない。旦那の服はもちろん論外。自身も女性としては大柄な方。寝間着ならなんとか・・・いや、どう考えてもずれ落ちてしまう。

（奥にあたしの娘時代の服でも無いかねえ）

と、奥の奥をまさぐってみる。しかし、嫁にきたとき、持ってきたかの記憶も曖昧なので期待は持てなかった。

（あら？）

なにか指先に箱のような物が当たった。引きずり出してみる。古ぼけた箱が出てきた。

「?? 何だったかね？」

遙か昔の記憶過ぎて、思い出せない。

取りあえず開けて、中身を広げてみた。

「あら、これ！」

思わず大きな声を上げる。おかみさんの記憶が鮮明に思い出されてきた。

これはおかみさんの娘時代の服だった。しかも、特別な服だ。ちようど少女と同じくらいの時に着てた思い出の服。

これなら針を通して少し調節してやれば着れるようになるだろう。

見劣りもしないはず。寧ろ、あの時の自分よりも、似合うかもしれない。想い出で閉まって置くよりも誰かに着てもらった方が良さそう。

「どうせなら風呂に入れて綺麗にしてあげようかね？」

おかみさんは何だか楽しくなってきた。
いそいそと少女の元に戻っていく。

「ちよいと、せっかくだからお風呂に、あらま!？」

戻ってみて驚いた。少女はマグカップのコーンスープをキレイに平らげていた。ガンの分も含めた二つともだ。

「アハハ、こりゃ早くご飯用意しないとね」

「……ん」

少女もコクリと頷いて肯定する。おかみさんはまた吹き出しそうになる。

「おっと、その前に、お風呂に入らないかい？ 気持ちいいよ」

少女はおかみさんの提案に少し迷ってから

「……入りたい」

頷いた。その際に、長すぎる前髪が目隠す。

「ん、よく見ると髪も伸び放題なんだねえ」

てつきりそういう髪型なのかとおかみさんは思ったがどうやら違うようだ。明らかに目に懸かりすぎており、ろくな手入れをしていないのか枝毛が目立つ。折角の綺麗な髪なのに勿体なく思った。

「良かったら髪も切るかい？」

「……ん」

少女は今度は間を空けずに頷いた。

「そうかい、髪型のリクエストはあるかい？ 長い髪にポリシ―
ってやつがあるとかさ」

「無い……切らなかつたら……伸びた」

「よし、わかったよ。それじゃ、支度するからね」

そういうと、おかみさんは部屋を出て、階段を降りる。

下ではガンがコロナの相手をしており、親方はイビキを掻いた。

おかみさんは親方を叩き起こし、風呂を沸かすように指示し、自身は簡単にコーンスープに手を加えてよりポリウムのあるものにして、作りおきのマッシュポテトとライ麦パンを用意しておいた。親方が風呂を入れると同時に二階へ上がり、少女を連れて風呂場
に。

怒涛の如く慌ただしさに目をパチパチとさせる親方とガン。その
真似をするコロナ。

しばらくするとおかみさんが泡だらけの両手を拭きながら横を通り
「覗くんじゃないよ!!」

と釘を挿して二階へと上がり、慣れた手つきで裁縫を始めてあつと
いう間に仕上げてしまった。

服を箱に詰めると散髪用のハサミ等の散髪道具を抱え込み、バスル
ームへと向かった。

バスルームの中で少女は泡だらけのバスタブに使ってジッと待つ
ていた。

おかみさんは身体と頭を吹いてやると洗面台の前に、即席の散髪
屋を作り上げると、少女を座らせると髪にハサミを入れ始めた。

おかみさんが慌ただしくバスルームへと少女を連れて閉じ籠って
からかなりの時間が経っていた。

「えと、おかみさんは、何をやってんすか？」

「いや、あの子風呂入れて髪切って色々やるって……なんかす
げえ生き生きしてっから、止めれそうになかったぞ」

「あの、大丈夫っすよね？」

「ああ、うちの母ちゃんはある程度何でもできっから……心
配は無いと、思う」

「大丈夫だよ！ 母ちゃんはスツゴいんだから！-」

不安いっぱいなガンと親方。対してニコニコと何の心配も無いと笑う娘の口口ナ。

「俺、やっぱり見てきて・・・」

無性に少女の事が心配になってきたガンが席を立とうとした時

「はい、お待たせだよ！ ん、なんだい立ち上がったりして？」

おかみさんが満足気な表情で戻ってきた。

「いや、ちよつと遅かったんで・・・」

「そうかい？ ちよいと待たせ過ぎたかね？」

どうやら、おかみさんは時間の感覚がなくなっていたようだ。

「けど、時間を掛けた分。我ながら満足なできになったよ。驚くんじゃないよ！？」

なんだか、おかみさんは凄く興奮しているようだ。

「はい、いいよ！ こつちおいで-」

おかみさんに呼ばれて、少しふらつきながらと少女が歩いてくる。

「・・・おお、おい」

「スッゴい！」

親方とロロナが思い思いの言葉を漏らす。

だが、ガンは何も言葉が出てこず、ただ眺めるだけであった。

少女は、紫色の瞳をクリクリと動かすと、ジッと見つめるガンに
対して、カクツと首を傾げた。

2・紫の瞳の「少女」――（後書き）

紫の瞳の少女がどんな恰好なのかはあえて引っ張ろうと思います。

2・紫の瞳の「少女」〜二（前書き）

特に衣装を引つ張らなくてもよかったような気がします。
結構普通かな？

2・紫の瞳の「少女」〜二

ふらついた足取りで、歩いてきた少女にガンは身体全体が痺れるような衝撃を受けた。

おかみさんの手により、少女の容姿は大きく変化していた。

白に近い銀色の長い髪は大胆にバッサリと切られ、少し癖の強いセミショートヘアになり、目を覆っていた前髪も切り揃えられ、紫色の瞳はより大きくみえるようになっていた。

服装はとても奇抜だが、少女によく似合う物だった。

黒を基調とし、胸回りとウエスト部が白く、フリルはスカート部のみのジャンパースカート。

ワインレッド色の小さなネクタイ。

脚を包み込む黒タイツ。

全体的にシックに纏められているこの服装は少女をとて魅力的な女の子に魅せてくれる。

カクツと首を傾げると、とても愛らしく。まるで「妖精」を思わせた。

「すっごい！ お姫さまだー！」

ロロナが両手を広げてピョンピョンと子犬のように跳び跳ねて、子供らしい素直な言葉を言った。

「お姫さま」という表現はとても的を獲ていた。

少女はとても高貴な存在に思えた。もしも、少女に微笑みという魔法を向けられたら、年の近い青少年達は、心を奪われてしまうであらう。

ガンは今までよりも更に強く、少女から瞳を離せなくなっていた。心を何かが締め付けるような、このたまらないものは、なんなのだろうか？

ガンには、解らない。今の少女の言葉を聞くと、どうにかなってしまいそうにも思えた。

「うんうん、嬉しい反応をしてくれるじゃないさ」

おかみさんはかなり満足げに頷いた。

「あのよ、その服。まさか」

満足げなおかみさんに親方がなにか気になる少女の服装の元になっている物について尋ねた。

「ああ、あたしの娘時代の祭衣装さ。あんたがあたしに初めて声を掛けてきた時のね」

「てめ！ 子供の前で言うんじゃないよ！？」

親方が慌てておかみさんの口を塞ごうとするが、おかみさんはそれをパシンと払いのけて軽く睨む。

「なんだい、慌ててからに。こっ恥ずかしい思い出でもあるまい

に、あんたあの時なにもして来なかったじゃないさ」

「ばっ！　おい、俺はあの時死ぬほど！？」

なにか言おうとして親方は口を抑えた。どうやら、この想い出は親方にとってかなり恥ずかしいもののようで

「んあ？　とっちゃん、死ぬほどなんなの？」

我が愛娘の質問にも答えることが出来なかった。そんな親方を見て、おかみさんは軽いため息をひとつ吐いて視線を少女に移すと服の感想を聞いた。

「どうだい着心地は？　どこかきつい所や気に入らない所は？」

「特に無い・・・けど」

「ん？　けど、なんだい？」

少女はおかみさんの服の裾を引っ張って唇を震わせる。

「・・・おなか・・・すいた」

少女が言うと同時にククという音があった。少女の腹がなったのだ。

その場にいた全員が思わず笑ってしまった。口ロナにいたっては子供らしい楽しいげな声でキャツ、キャツと笑った。

ガンも自然と口の端を上げる。手で押さえて口元を隠して耐えようとしますが、どうにも無理そうであった。

あんなにも奇妙だった感覚が和らいでいる。完全に取り払われてはいないが、いままでとは少し違う感覚がガンの中で生まれていた。やはりなにかはよく解らないが、例えるなら優しい感覚であろうか？　こるをなんと呼べばよい感覚なのか、ガンにはよくわからなかった。

「そんじゃ、みんなで飯でも食うか！　ガン、お前も食ってくだろ？」

「うす、いただきます」

断る理由はなかったのでガンは頷く。

「みんなでごっはん〜!!」

ロロナは嬉しくてしょうがないのかおかみさんのスカートに掴まってブンブンと興奮しながら振り回した。

「コラ！　少し落ち着きな!!」

そっとうとおかみさんはロロナを持ち上げておでこを小突いた。

「ごめん！　キャハ!!」

ロロナはごめんなさいをしながらウキウキと笑った。

「よし、嬉しいのはよくわかったから、お利口に」

降ろしてやるとロロナは少女に向かってニンマリと笑って

「ごはんだって！ よかったね！」

と言った。

「……………ん」

少女はまっすぐなロロナの笑顔に瞳を動かし、コクリと頷いた。

「それじゃ、準備しようかね」

「ロロナは！」

両手を広げて、お手伝いしたいと元気にアピールする。

「ん、もちろんお願いするよロロナ」

おかみさんはそれを微笑ましく思いながらお手伝いをお願いした。

「はいはいはい！」

ロロナは母にお手伝いをお願いされたことが嬉しいのか何度もハイを繰り返しながら少女に向き直り

「一緒にやる！」

と、誘った。

「……………一緒？」

少し黙ってから、少女は再度自身を指挿して確認をする。

「ん・・・・・・・・一緒に？」

「そだよ！ 一緒にだよ！」

ロロナは屈託無く笑う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少女は黙ってしまうが、しばらくすると

「ん・・・・・・・・やる」

一緒にやることを了解した。

「じゃ、行こ！ えっと」

ロロナは少女の手を握ると、あることに気付いて少女に聞いた。

「ねえ！ 名前なんていうの？ 教えて！」

「・・・・・・・・な・・・・・・・・まえ？」

名前？

ガン達はその時になって気付いた。少女の名を聞いていなかったことに。

「ガン？ この子なんていうんだ？」

「あ、いや、なんていうんだろ」

「なんだ、気が付いた時に聞いてねえんか？」

（そういや、なんで名前聞かなかったんだ？ 聞けるチャンスいっぱいあったのに）

ロロナが聞かなければ、ずっと聞かなかったんじゃないか？

ガンは何故かそう思った。まったく根拠など無いのだが。

「……名前……」

呟いてから、少女は瞳を閉じて少し黙る。やがて、ロロナの笑顔を見ながら自身の名を言った。

「……リタ……」
「リタ・テリユーク」……
リタ……リタ……リタ

なぜか、自身の名をゆっくりと何度も呟いた。まるで、噛みしめるように。

少女、リタはロロナと共に食事の用意を手伝った。といってもロロナが食器を運び、リタがそれをロロナの言われた場所に置くとい

う簡単なものだったが、リタはふらつく足取りとおぼつかない手の動きでとても大変そうに見えた。

一瞬、がんと親方は手伝おうかと思ったが、なにか与えられた手伝いを懸命にやろうとしているリタを見てやめておいた。
コロナにも

「お手伝いのじゃダメ！」

と、釘を刺された。

おかみさんにより食事が盛りつけられると、全員テーブルの前に座ると、食事前の感謝の祈りを捧げる。皆の様子を見ながらリタも見よう見まねに両手を添えて胸に当てて瞳を閉じる。

数十秒の祈りが終わり

「それじゃ、みんなでいただきますだ」
親方の合図と共に

「いただきます」

皆がそれぞれのいただきますをして食事が始まった。

「あ、ちよつとまつー！」

のだが、コロナがそれを大声で止めた。

「どうした？」と、皆がコロナの方を向いた。

「さっきリタちゃん自己紹介した！」

「うん」

「だからロロ達もしないとおかしい!!」

ああ、最もだと思った。確かに名前を教えてもらい、食事も共にする相手にそれはとても失礼なことだった。

しかし、何故ロロナに言われるまでその事に誰も気付かなかつたのだろうか？ いつもはそんなことは無いはずなのに。とても不思議だった。

「ロロはロロナっていいます!! ロロと呼んでください!!」

先ずは言い出しっぺのロロナが初めになぜか丁寧語で自己紹介した。

「ん……ロロナ……ロロ」

リタはコクンと頷いて名前を繰り返した。

「あたしはみんなからはおかみさんて呼ばれるけど、本当はマリ―ってんだ。よかつたらリタちゃんはマリ―おばちゃんて呼んでも構わないよ?」

「ん……おかみさん……マリ―……マリ―おばちゃん」

「ケンだ。ケン・ベルト。ハハ、気楽に親方とでも呼んでくれ!」

「ん……ケン……ケン・ベルト……おやかた」

おかみさんと親方の自己紹介も終わる。リタは同じように名前を繰り返していく。

「最後はガンちゃんの番だ！」

ロロナの声と共に、リタがこちらを向いた。

（なんか、緊張すんな。なんでこんな緊張するんだ？）

幾分、和らいているものの、あれはまだ現れる。あの奇妙な感覚、リタに見つめられ、見る度に目が離せなくなるあれが。

だが、苦しいわけではない。もっと別なものだ。大丈夫。いける。

「ガン、俺、ガン・アーロン。ガンでいい」

緊張を隠しながら、ガンは自己紹介を終えた。

「ん……ガン……ガン・アーロン……」

同じようにリタは名前を繰り返す

「……テリー」

——え？

「違うよ。ガンちゃん！」

「ん……ガンちゃん」

違う名前を言ったりリタは口口ナに言われて、同じように復唱する。

テリー。最初にリタを見つけた時から呟かれたこの名前。
なんなのだろう？ テリーとは？

「そーいや、嬢ちゃんは何であんな場所にいたんだい？」

食事をしながら親方はリタに聞いてみた。

「あんな……場所？」

リタはパンを千切りながら首を傾げた。

「おお、そうか。ここに来るまで眠ってたんだもんな。ええと、嬢ちゃんはどっから来たんだい？ 「気流」から流れて来たのかい？」

「よく……わからない？」

リタは質問の意味自体を理解できていない様子だった。

「ああ、おお、ええとなあ」

「親方、いまはゆっくり食べさしてあげましょうよ」

「え、おお、そうだな。すまねえ嬢ちゃん」

ガンに言われて、親方は質問をやめてリタに謝った。

「ん・・・いい」

リタは首を横に降って気にしていないと伝えた。

「そつか、すまねえ。あ、ガンには感謝しとけよ？ 嬢ちゃんを助けたのはこいつなんだから」

「ちよつ、親方！」

「ん？ 俺、なんか悪いこと言ったか？」

ガンは慌てた。まるで感謝を強要しているように感じたからだ。もちろん親方はそんなことは微塵にも思っていないので首を傾げる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それを聞いたリタはジッとガンを見つめる。ガンは向けられる紫色の視線に息を呑んだ。

そんなガンにリタは一言

「・・・・・・・・あの」

「ありが・・・・・・・・とう」

リタはたどたどしく、礼を言った。

その礼の言葉はなんだかむず痒く感じた。

「母ちゃん。なんでガンちゃんは変な動きしてんの？」

「さあてね。思春期のアレかもね」

ロロナはよくわからないといった感じで、おかみさんは優しげな笑顔でガンとリタを見つめた。

「おい、ガン。本当にいいのか泊まなくて？」

食事を終えたガンは家に帰ろうとバイクに跨がった。

「ありがたいんですけど、ドンが待ってますんで」

ドンとはガンの祖父ボンが飼っていた犬の名である。祖父が生きていた時はずっと祖父が世話をしてきたが、祖父が亡くなった後はガンが引き続き面倒を見ている。ガンが仕事に行っている間は家にはいらしく。よく街中で見かけて一緒に帰る事が多いのだが、今日はいつもととは違ったので、一匹で家に帰って待っているに違いない。

「それじゃしゃあねえよな。ん、あの嬢ちゃんはこっちでしばらく面倒みっから、ドン連れて遊びに来い」

「うす、親方の所なら安心す。ちゃんとご飯食べてたし、すぐに元気になるよな」

「おお、ビックリするぐらい食ってたからな！」

二人は食事の時のリタを思い出す。

リタはあの細い体のどこに入るのだろうというくらい食べた。ボリウムたっぷりなコンスूपもマツシュポテもすっかりと平らげ、おかわりもしてみんなを驚かしていたが本人はよくわかっていないようだった。

ガンはリタに対して感じるあの感覚がリタを知っていくことで完全に消えていくのでは考えていた。長い時間を掛けていけばきっと大丈夫。とても素敵な子だと思えるから。

「…………あの」

その時、後ろの方で小さくて、少し掠れた独特な声がした。

「…………ん」

いつの間にかリタがそこにいた。

「おいおい、そんな格好で！ 風邪引いちまうぞ！」

親方は慌ててリタの前に駆け寄った。あのリタに良く似合っている服は腕周りに布地が無いのでとても寒そうに見えるのだ。

「…………あの…………ね」

それと、リタについて少しだけわかった事がある。 どうやらリタは言葉は知っているが、それをうまく口に出せず、時間が掛かってしまうようだ。そして、歩きが少々覚束ないようで常にふらつくこと。手の感覚が普通とは違うようで食器を片手で持つことはできず。

熱いという感覚も鈍いようなのだ。

「あの・・・ね」

思考が子供に近く。同じ言葉を何度か繰り返す事がある。

そして

「・・・さよなら・・・あいさつ・・・いいに」

心は優しい少女だ。

「そっか、じゃ、ガンにさようならのあいさつしな」

親方はそれを聞くと、優しく言いながらガンの前を開けた。

「あの・・・また・・・ん・・・・・・さよなら」

「うん、さよなら。また、明日な」

「あし・・・た？」

リタはガンの言葉に首を傾げた。

「うん、明日またくる。迷惑かな？」

「んん・・・迷惑じゃない・・・また・・・あした」

「!?!? また明日!!」

ガンはリタが少し笑ったように見えて、胸が熱くなって、慌ててバイクを発進させた。

「あ！ おいガン！！」「デカブツ」の調子戻ったらエリア拡大やるからそれまでしっかり身体休ませとけよ！！」

いきなり発進したガンに後ろから言っていなかった事を大声で言っ
た。

「ういっす！！」

返事はした。だが、覚えていられるか自信はなかった。その理由は

（そうか俺、そうだ。嬉しいんだよ俺！）

——あの子に、リタに

——またあしたが、嬉しかったんだ。

2・紫の瞳の「少女」〜三

街から少し離れた高台の上にある鉄板と木の継ぎ接ぎの小さな家。ここに、ガンは住んでいる。亡き祖父ボンが建てたこの家にガンは犬のドンと共に生活をしている。

いま、ガンはベッドの上で眠っている。特に、急ぐ用もないので久しぶりにグータラと朝の時間を、彼曰く「有意義に」消費していた。

そんな彼の寝室に、何かが、入ってきた。かなり低い位置の気配だ。

ガンはそれに気付いていたが

（ドン、またきたか）

と、そのまま「有意義な」消費を続ける。

そんな彼の耳元に何かが響く。

「おはよ……ございます」

これは、ドンではない………明らかに人間。しかも、この声としゃべり方に覚えがあった。

ガンはバサツと飛び起きて横を見た。

「ん………起きました」

視界に入る。

白に近い銀の髪と薄い紫色の瞳。

そこに少女・リタ・テリユークがいた。

昨晚と同じく首をカクツと傾げてこちらを見ていた。

昨晚と違う所は少々大きな長袖の茶色いカーディガンを這おっている所だ。今のガンの視界からは見えにくいが昨日の服の上から這おっているようだ。

いや、ガンにはそんなことはどうでもよかった。それよりもなぜ

「なんで、ここに」

「……起こしに」

答えてくれたがガンの質問とリタの答えは違うものであると思われる。

「えと、なんで家に、うん、いるの？」

ガンは言い直した。少し、リタを見つめていると起こる妙な感覚が顔を見せ始めているが、特に気になる事ではないのでリタの答えを待つ。

リタは目をクリクリと器用に回し、少し間を開けて、「……あ」と言つと

「……遊びにいこう……と、口口に……言われて……」

・来ました」

ここにいる理由を答えた。

「え？　口口も？　てか、二人だけで来たの？」

ガンは驚いた。確か、リタは少し足下が覚束ないし、口口ナはまだ四つ。そんな二人がここまで来るのはかなり大変だったはずだ。

「んん．．．ここまでは．．．おやかたに．．．帰りは、ガンちゃんに．．．送ってもらう．．．ようにと」

謎はすぐに解けた。なるほど、それなら合点がいくというものだった。親方自慢の動力三輪車を引っ張り出したに違いないとガンは思った。

「あの．．．起き．．．ますか．．．起き、ませんか？」

リタが目をパチパチとさせて尋ねてくる。

「ああ、そうだな。起き——」

せつかく来てくれたのだ。起きないわけにはいくまいと、動こうとした時はたと気付いた。いま、自分は独り暮らしの男特有の寝姿だという事に

「ごめん、着替える」

「．．．．ん」

下はシートで隠れていてよかったと思いながら動こうとする。

「・・・・・・・・・・」

が、リタが出ていこうとせず、ジッとガンを見ている。これでは、動けるものではない。

「あの、なにか？」

とりあえず聞いてみる。

「着替え・・・・・・・・待ってる」

そんな応えかたをされても、そこで待ってもらわれては困るというものだ。

「部屋の外で、待っててくれないか？」

「・・・・・・・・なんで？」

「な、なんでも」

「・・・・・・・・ん」

リタはよく解らないといった感じに首を傾げて部屋を出ていこうとするのだが

「あの、なんでそんな態勢になるの？」

リタは屈んで四つん這いになっていた。

「ん．．．ここ．．．散らかつてる、から．．．動きにくい、から」

どうやら足下が覚束ないために、色々と散らかつているこの部屋を動くにはこの態勢のほうが移動しやすかったらしい。なるほど、最初に入ってきた時に気配が下にあった事に納得できる。

が、その態勢だと色々とヤバい事になる。リタのスカートは短めだ、這おったカーディガンでギリギリにガードができていたのだが、それでも目のやり場には困るというもので。

ガンは極力見ないように反対の壁をジッと見るように努力した。

「じゃ．．．口口と、待ってます」

ドアまでたどり着くと少し危なかった立ち方で立ち上がると、そう言い残し部屋を出ていった。

部屋に残されたガンは、悶々とした頭を掻きむしって自己嫌悪した。

（俺の、バカヤロ〜!？）

ガンが着替えを済ませ、なんだか気まずく感じながらリビングに

来てみると。

「おっもしろ〜い！」

ちょうどロロナがドンに跨がって長く垂れた耳をパタパタとさせてキヤッキヤツと笑っていた。

ドンは跨がられても嫌そうにはおらず、特に興味が無さそうに目をトロンとさせて寝そべっており、その様子をリタが椅子に座ってジツと眺めていた。

「おはよう」

ガンが朝の挨拶をしてみると

「あ、おはよう！ ガンちゃん！！」

元気な挨拶が返ってきた。ドンは尻尾を二―三振るだけの挨拶をしてきた。

そして

「ん・・・おはよ、ございます・・・ガンちゃん」

リタも二度目の挨拶を返してきた。そんな彼女の姿を見ると先程の光景がガンの頭の中で蘇り、それをガンは慌てて掻き消して

「あ、その、ごめん！」

謝ってしまった。リタはなぜ自分が謝られているのかよくわからずカクツと首を傾げる。

「……なんであや、まるの？」

「いや、なんか、な、うん。何でもないです」

特に説明をするとなんだか泥沼に填まるような気がして、理由を言うのはやめておいた。

「ガンちゃんおかしっ！　へっんなの！　ね〜！」

無意識に変な動きになっていたガンに口ロナが楽しそうに笑って、ドンの耳を持ち上げ、耳元で大きな声で言った。ドンは欠伸を噛み殺すだけであつた。

「……ん、ガンちゃんは……変ですか？」

リタが目パチパチさせて聞いてきた。

「や、変じゃない」

取りあえずの訂正。

「……ん、ガンちゃんは……変じゃないです」

「あの、さっきからなんで俺をガンちゃんて？」

リタがずっとガンちゃんと呼ぶので何か気になって聞いてみた。

「……口ロが、ガンちゃんと……呼んでるか、らです……
……だめ？」

「いや、別にダメじゃないけど」

「……ん、なら……問題ないです……ね」

特に嫌ではないからそのまま呼ばせてあげようとガンは思った。それよりも、もうひとつ気になる事があるので聞いてみる。

「なんで、敬語？」

するとリタは不思議だと言いたげにしばらくジッとガンを見つめてから理由を言った。

「ん……ガンちゃんは、こんなかんじ……の、言葉が……
……凄く……好き、だと……おばさんが、言うので」

（なにを吹き込んだんだ！ あのおばさん！）

おかみさんの悪戯な笑顔が目には浮かぶガンであった。

「あの、特に敬語はいらないから」

「……ん、わかった」

そこは訂正を要求すると、すんなりリタは応じてくれた。

「それで、おい口口。何しに家に来たんだ？」

「え？ 遊びに来たんだよ？ ガンちゃんお休みでちょうどいいからリタちゃんと一緒に遊んで来いってケンが言ってた！」

なにがちょうどいいんだとガンは思ったが、特にやることが今日は無いのでまあ、言いかとも思った。

ちなみに、ロロナは親方の事をケンと呼び捨てにする。これは、おかみさんが親方の事を二人きりの時にこう呼ぶのを覚えたかららしいのだが、親方はできればパパと呼ばせたいらしく、矯正の努力をしているが効果は出ていない。

「それでね、どうせならリタちゃんに街をガンちゃんと一緒に案内しようと思ったの！」

ロロナが今日のプランを提案してみた。ガンもこれには賛成し

「いいなそれ。うん、行こう」

グツとロロナに親指を起てる。ロロナもフンと得意げに笑って親指を起て返した。リタもよく解らないが取りあえず親指を起ててみた。

「じゃ、せつかくだからバイクで行こう」

ガンは足の覚束ないリタとまだ小さいロロナの事を考えて、荷台付きのバイクを出すことにした。

「やった！ バイクだ！」

ロロナは大喜びをして万歳をし

「ん……た」

リタもよく解らないが万歳をしてみた。

「ドン。お前もどうせ街に行くんだろ？ 一緒に行こうぜ」

ガンの声にドンは軽く

「アオフ」

やる気の無さそうな鳴き声で返した。

こうして、三人と一匹は街に繰り出すことになった。

炭鉱街「エコー」

炭鉱業により日々の生活が潤う街。

ここで採れる「ディーラ鉱石」は生活燃料として重宝し、世界中に送られている。

が、特に観光客が訪れることは無い。ごくたまに遺跡調査の学者が入れ替わっていくぐらいが外からの訪問者と言えるだろう。

故に、この街に観光名所なる物は存在しない。ある意味、遺跡の

上にあるこの街そのものが観光名所といえるのだろうが、ここに住む住人達には生活の場であるためそういう考えには到らない。

それ故に、住人であるガン達にはリタを案内できそうな場所が思い付かない。

取りあえず、ロロナの提案で広場に行く事になり、バイクの荷台に揺られながら、広場に到着した。

「あゝ、ガツタガタで面白かったね！」

途中の悪路を思い出しながらロロナがキヤイキヤイと笑う。

「ん・・・面白か、た」

リタも面白かったようだ。

「オオ・・・ウ」

反対にドンは気持ち悪かったようで、小さく唸って荷台の隅で経たり込んでいた。

「だい・・・じょうぶ？」

リタが背中を擦ってあげると「オッ、ホウ」と気持ちよさそうな鳴き声を鳴らす。

「ああ、ドンは時間が経てば元気になるよ」

「・・・そう？」

ガンの一言でリタはそっ、と撫でるのを止めた。

「ブフウ」

余計な事と言いたげな批難めいた鳴き声を挙げて飼い主を恨めしそうに睨むドン。

「で、広場に来たはいいが、どこ案内するきだよロロ」

その鳴き声等を気にせずに、ガンはロロナに尋ねた。

「んゝつとね」

ロロナが唸る。辺りを見回してもこの広場には特になにもない。あるといえば端にある行事等を連絡する掲示板ぐらいのものだ。

ロロナはたまにやってる大道芸に期待していたのか、キヨロキヨロと辺りを見回すが、今は生憎なにもやっていない。

ロロナは更に考え込むと急に何かを思い付いたようで、お腹をポンと叩くと元気にこう言った。

「おなかすいた！ なにか食べようよ！」

特に反対する理由もないので、一行は広場の端にバイクを停めて食べ物求めて市場に移動する事にした。

ロロナがドンにしがみつinaながら前を歩く。その後をガンとリタは歩く。

リタは覚束ない足取りで辺りを物珍しそうにキョロキョロと見回していた。

「やっぱ、バイク持ってきたほうがよかったか？」

ふらつくリタを見ていると少し心配になる。

「……………んん」

しかし、リタは首を横に振る。

「……………こう、みんなで歩くのが、いい……………とても、いい」

「そっか、ならいいか」

「……………ん、いい」

リタがこつくりと頷く。その姿がとても可愛く見えた。

すれ違う人達も振り返るほどの可憐さであろう。

いや、本当に振り返っているようだ。やはり、リタの髪と瞳は物珍しいのだろう。それがなくとも美しい顔立ちをしている。そのうち、誰かに声を掛けられてもおかしくはない。

「お、おお！　おいおい！…！」

そう思った矢先に大きな声が近づいてくる。しかもこの無駄にでかいダミ声には聞き覚えがあった。

（面倒なひとにあった・・・）

「おい誰かと思えばガンじゃねえか！　おいおい、誰だこのべっぴんな嬢ちゃんは！！」

「はは・・・どうも」

取りあえず、苦笑い。相手はいつも朝に挨拶替わりの野次を飛ばしてくる男だった。悪い人では無いが立ち止まると結構絡みがしつこいのだ。

「ん・・・おはよう」

だが、リタは律義に立ち止まって挨拶をした。

「おお！　おお！！」

なにがそんなに嬉しいのか男は妙に高揚しているようにみえる。

「ど、どこで引つかけたガン！　お前には勿体ない！　生意気だ！　俺なんて、俺なんてなあ！」

まるで、酔っ払いだ。いや、もしかすると酔っているのかもしれない。なんだか余計に面倒な事になりそうな予感がガンはした。

「なにしてんの！！」

その時、ドンと一緒に先に行っていたロロナが戻ってきた。

「ああん！　なんだ！　ケン所のチンチクリンじゃねえか！！」

ロロナをみやると男はダミ声で笑う。チンチクリンと言われてロロナはムツとした。

「チンチクリンじゃない！！」

「いいや、チンチクリンだ！！　ちんまいちんまいチンチクリンだ！！」

「大きくなるもん！」

「ダハ！　大きくなってもチンチクリンだ！」

「違う、母ちゃんみたいにでっかくなるんだもん！」

男は凄く大人げなかった。このままではロロナがそのうち泣き出してしまいそうだった。

ガンはそのあたりで止めるように男に言おうと思った。その時

「・・・・・・・・ダメ」

リタが先に間に入ってきた。

「ロロナ・・・・・・・・可愛いそう」

「おい、お嬢ちゃん」

「・・・・・・・・・・」

「俺はちょっとからかうつもりで」

「・・・・・・・・・・」

「あの」

「・・・・・・・・・・」

「ごめんなさい」

男はジッと睨んでくるリタに気圧されて謝った。

「すまなかったな、□□、おっちゃん調子にのった」

□□ナにもきちんと謝った。

「うん、いいよ」

□□ナも男を許した。

「じゃ、じゃあな。おい、ガン。結構、おっかねえぞあの嬢ちゃん」

男は「ケンカにや気を付けろよ」とガンに耳打ちして去っていった。

（気を付けろよと言われても・・・・・・・・）

「□□・・・・・・・・だいじょうぶ？」

「うんありがとリタちゃん」

「……………」

（この娘を怒らせることなんて俺にはなさそうだ）

コロナの頭を撫でるリタは本当のお姉さんのようでそれを見ると

「ん……………」

「いや、別に」

微笑ましくて、自然にリタに笑顔を向けられる気がガンにはした。

「……………」

リタはカクツと首を傾げた。

「おやガン？　おはよう。今日はお休みかい？」

市場に來ると馴染みのおばちゃんが声を掛けてきた。

「ああおはよう。」

ガンが挨拶をする。

「あらあら、今日は両手の花じゃないか」

おばちゃんがコロナとリタに気づくとニヤツと笑う。

「コロと散歩かい？ そちらのお嬢さんは始めてみるね？」

「おっはようございます！」

「ん．．．おはよ、ございます」

コロナが元気なおはようの挨拶をする。リタもそれに続く。

「はい、おはよう。いい挨拶だ」

おばちゃんも挨拶を返す。

「ガン、あんたのコレかい？ 見たところ外国人みたいだけど、どこで騙して来たんだい？」

「コレでもねえし、騙してもねえよ。変な勘繰りはやめろ」

「お嬢さん。お名前は？」

おばちゃんはガンの話しなど聞いちゃいなかった。

「ん．．．リタ」

「そう、リタちゃんかい。ガンのことよろしくね」

「．．．．．」

リタはしばし考えてから

「ん……よろしく、されます」

と応えた。

「アツハハ、面白い娘だね！ ガンもいい娘を貰ったもんだ」

「まてまて！ なに勝手に話が進んでんだ！ とうか、何を言っ
とるんだ！！」

おばちゃんは邪推して、からかい倒すつもりだろう。これ以上ここ
にいてもガンのために良いことはない。この場を移動することにした。

「じゃ、そういうことで」

「あ、待ちなよ」

「何だよ？」

「お祝いだ。持ってきた」

おばちゃんは紙袋を投げ渡した。その中身は袋いっぱい砂糖たっ
ぷりの揚げ菓子だった。

「へ？ こんなに？ えっと、いくら？」

「お祝いつていったろ？ おばちゃんの奢りさ」

「そついうわけにもいかないだろ？」

「いいってんだよ。その代わり、責任取るときには挨拶にくるんだよ」

（責任ってなんだ？ なんの挨拶だ！！）

おばちゃんはシタリと笑って背中が寒く感じた。

「ロロにはクキ飴もあげようね」

「わっ！　ありがとう！」

思わぬ所で、食べ物を手に入れてしまった。

「で、そっちのご予定はあるのかい？　なんならロロを預かっても」

「だから何の話だよ！？」

手近に座れる場所で揚げ菓子を食べる。ロロナはそうそうに食べ終え、ドンと戯れていた。

残された二人は横ならびに残りの揚げ菓子を片付けていく。

「あの、さっきのごめん」

ガンはなんとなく話しかけてみる。

「……………ん？」

リタは口元を砂糖だらけにして食べながらガンを見た。

「ほら、おばちゃんをやつとか」

「ん……………気にしない……………はなし、わからなかった、から」

「あ、そつか。解んなかったんならいいや」

「何の、はなし……………だったの？」

「や、俺にもよく解んないかな!？」

ガンは誤魔化しながら揚げ菓子を一気に頬張った。鼓動が自然に早くなる。

「……………」

「んぐっ、どうした？」

ジッと見つめられてガンは喉に詰まらしそうになった。

「……………ん。なんでも、ない」

いって揚げ菓子を口にするリタ。

「ここは……………たのしい」

「ん？」

「わるい……。ひと、いない。いい……。ひと、ばかり」

「ああ、ま、ちょっと度が過ぎる人らも多いけどいい奴ばっかだな。て、いきなりどうしたの」

「ここ……。リタの、世界に……。なるかな」

急にそんなことを話し始めてガンは少し困惑した。

世界になるとは、どういうことだろう。

リタは自分の居場所を探しているということだろうか？

「あ、砂糖つきまくりだな。ほら」

とりあえず、ガンはリタの砂糖だらけの口を拭ってあげた。

（あ……）

口元が綺麗になると、油で艶っぽくなった唇が強調され、ガンは息を呑んだ。

なんだか吸い込まれるような気分になる。いままで耐えてきたものが流れ出すようなそんな気分に

「……。ガンちゃん」

なんだかりタの声が遠くに感じる。

「ん……。やっぱり」

これは、最初の感じに、戻りそうな。

「テリー……みたい」

テリー？ その名前で一瞬遠くにいつていた意識がはつきりとする。

「顔も……声も……けど……テリー、みたい」

何度も聞くリタの口から聞いた名前。テリー。一体、何者なのだろうかとガンは知りたくなった。同時に胸の奥がとても熱くなった。

「テリーって誰？」

「……ん……テリーは」

ガンの問いにリタは少しづつ答えようとしてくる。

その時

「な、何だ！？」

「!!!?……あ」

遺跡の炭鉱街「エコー」に、爆音が響いた。

何だ！？ 何があった地震か？ わからないよあたしに聞かれても！

ざわめく住民達の声。こんな耳をつんざく暴力的な爆音は炭鉱夫以外の者は聞いたことがなかった。

おい、谷が、炭鉱場近くの谷が煙を上げてる……。

誰かの声が聞こえる。そこはガンのよく知っている場所だった。

（そこ、「気流」の流れ場じゃねえか！？）

仕事場の一つであり、リタを見つけたあの場所。

「ガンちゃん、これなに、こわい！」

ロロナがいつの間にか、ガンの足元にしがみついて震えていた。

「大丈夫だ。心配すんな」

ロロナをなだめるガンだったが、大丈夫なんて保証はなにも無かった。

「なんなんだよ……」

ガンは「気流」の流れ場の方角を睨む。建物に隠れているが、煙が確かに見える。

「……？」

不意にガンは手を握られた。

「リタ？」

隣のリタを見ると

「!!!?　おい!？」

リタはいままで見たことの無い恐怖に凝り固まった表情で震えていた。

—— 怖い、人が、来た……。

2・紫の瞳の「少女」ゝ三（後書き）

特に必要の無い場面がありました。

話は、大きく動く予定です。

3・「巨人」の追跡者

ガンは駆けていた。リタを両手に抱え、駆けていた。

後ろを振り返る気にはなれない。後ろにはきつと地獄が見える。
降り立った数機の巨人。T・Aトレス・アームによる圧倒的な蹂躪の地獄が。

銃撃の咆哮。破壊の地鳴り。建物の崩壊。街の人々の悲鳴。恐怖、
恐怖、地獄、恐怖。

何故こうなった。先程まではみんな笑っていた。活気が満ち溢れていた。いつも通りの日常がそこにはあった。
何故だ。

全ては空を焦がすような爆発音から始まった。そこから上がった
煙の柱。それを突き破る空を飛ぶ鉄の船。そして船から現れた巨人。
T・Aトレス・アーム大地を抉り、地上に降り立った奴らはノッペリとした頭部に
無骨な灰色ボディ。腕部にはマシンガン式ライフルが握られていた。

人々はただ、目の前に現れた巨人に啞然とし、巨人はそんな人々
を見下ろし、銃口を建物に向け、発砲した。

全ては異様。歪。破壊の悪夢が始まった。

熱い。怖い。怖い。怖い。怖い。熱い。熱い。熱い。熱い。

（くそ、くそ、くそ！！）

「チックショウウウツツ！！？」

恐怖に震えて動けない。元々足下の覚束ないリタを抱えて全力で駆けるガンは絶叫した。

わけが解らない。あれは何だ？ トレース・アーム？ 何で街を壊す？ 何でだ？

（俺達は何をしたってんだよ）

あいつらはなんなんだ。

ロロナとはぐれてしまった。ドンとはぐれてしまった。

「ロロ！ ドン！」

駆けながら名を呼ぶが、応えは返って来ない。

（無事で、無事でいてくれよ）

まだ子供なんだ。護ってくれよ、神様。

いるかどうか解らない神様にガンは頼み込む。

「・・・・・・・・」

腕の中のリタがギュッとガンの服を握る。口元が微かに動いたように見えた。

「口・・・・・・・・口」

と。

「大丈夫、口口は大丈夫だから!!」

根拠の無い大丈夫をリタに何度も言う。今は、安全な場所まで離れる。離れるんだ。

だが、安全な場所なんて何処に？ ガンは何処へ向かっている？
全ては闇雲に走り回るだけだ。

他の住人達と共に。走っているだけだ。

そして

奴らは此方に向かってきた。

表情の無い数機の巨人が、全力で駆け抜ける皆を嘲笑うかのよう
に。

巨人は背面の飛空ユニットによる低空飛行で、逃げる人々に凶悪
な風を送り込む。何人かが吹き飛ばされる。ガンとリタも空中を飛
んだ。ガンはリタを抱え込み、強く抱き締める。体は大地に叩きつ
けられた。

背中を打つ痛み。脚を打つ痛み。腕を打つ痛み。地面を転がる様

々な身体の痛みがガンを襲う。
それでも、ガンはリタを離しはしなかった。彼女に痛みを与えまいと更に強く強く抱き締めた。

風が止む、身体の回転も止まる。身体は仰向けに、太陽を眺める形になった。

（リタは・・・・・・・・）

無事か？

腕の中のリタ。身体の震えを感じる。小刻みな吐息も感じる。
リタは生きている。少なからずの安堵を覚える。

リタの様子を見ようと思った。だが、突然太陽の光が遮られた。

あのT・A達がガンとリタの元に降り立ったからだ。

（・・・・・・・・こいつら）

ノッペリとした数機の機械頭部がガンとリタを見下ろす。

「なんなんだ」

この巨人達は何をしにきた？ 街を壊し、皆を酷いめに遇わし。

ガン達を見下ろす。なにか目的のある行動か？

（俺らがなにした）

あの鉄の壁の向こうには人が乗っているのだろうか？　だとしたら、これは人のやることか？

恐怖よりも怒りが勝った。

「なんなんだお前らはああっつ！！？」

声が潰れる程の叫び。腕の中で震えるリタを更に強く、抱き締める。

．．．．．

ガンの叫びに巨人達は反応しない。ただ機械音になるのみ。

いや、動きが起きた。クオンと短めの駆動音になり、巨人の一機が手を突き出した。

そして、なにか動物を捕獲するような網が目の前に広がった。

ガンは咄嗟にリタに覆い被さり、巨人に背を向けた。いまだ震えるリタを抱き込んだ。

それに幾ばくの意味があるのか？　こんな巨人達の前には、なんの意味もなさないだろう。

ガンは強く目を瞑った。

リタはそんなガンに紫の瞳を向けた。

そして、再び瞳を閉じ、自身もガンの身体を抱き締めた。

二人の身体は大地を放れた。

— 126
め
ん

3・「巨人」の起動・咆光（前書き）

表現に迷ったのですが、ロボット物ならこれは普通かなと思い、このままで行くことにしました。

やっぱり問題かなと思ったら書き直します。

3・「巨人」の起動・咆光

ドスン！ と体をしこたま打ち付ける全身の痛みにはガンは声にならない空気の塊を吐き出した。

（いったい、どうなった？ 確か俺達は・・・・・・・・）

ガンは思い出す。自分とリタがどうなったのかを。

あのノツペリ顔の巨人達に捕まってしまったのだ。

ガンはゆっくりと目を開ける。最初に確認をしたのは、腕の中にある温もり。

「リタ」

大丈夫。自分の腕の中に彼女はいる。限りなく白に近い銀の髪が鼻を撫る。

綺麗な白い顔はガンの胸に踞って確認をすることはできないが、リタがそこにいるだけでガンは束の間の安心をした。

だが、今は真の安心を得ることはできなかった。

いま、自分達がどんな状況にいるのか、ガンは確認をしなければならなかった。

周りは妙に埃っぽく、工業油のような臭いが鼻を突く。そして、とても冷たい風がガンの体を突き抜けていく。耳には静かな風の音しか聞こえない。先程の爆撃の音がウソのようだ。

ここは奴らの基地かなにかだろうか？ しかし、なぜ自分達は拘束もされていないのだろう？

ガンは恐る恐る、顔を上げてみた。自分達のいる場所を確認する必

要があつた。

「!!!?」

冷静でいるつもりだった。だが、ガンは冷静になることはできなかった。

ガンの視界に最初に入ってきたものは衝撃的だった。

「デカ・・・・・・・・ブツ?」

そこには、ガンのよく知っている巨人の姿があつた。

「デカブツ」ガンの祖父の代で「発掘」された「トレース・アーム」この街の、この鉾山に必要な存在。

見下ろすように、そこにいる。すごく近い距離で、継ぎはぎだらけのボディを、まるで背中をもたらせるように、脚を投げ出した人形のような姿で、そこに「デカブツ」がいた。

操縦席をむき出しにして、ガンとリタを見つめていた。

「なんで・・・・・・・・デカブツが」

辺りをもう一度見回す。

ボコボコとした岩肌が目立つ薄暗い空間。ここにガンは見覚えがある。毎日通っている場所。

「ここは、鉾山か?」

それもかなり深い所に思える。

しかし、なぜ鉱山に？　こんなところに自分達を置き去りにしてあいつらは何がしたい？　それに、デカブツだ。ここはデカブツが保管されている倉庫ではない。大事なデカブツをこんなガラクタのように鉱山のみんなが放置するわけがない。

「本物、だよな？」

ガンはリタを抱えたまま、操縦席へと歩く。ちょうど進む道と操縦席が平行になっていた。

「やっぱり、こいつ、デカブツ」

近づいてみて確信できた。操縦席、ガンがシートにキズを付けてしまった跡がある。こんなもの二つとありはしない。

「火が、入ってるのか？」

明滅するランプ類が目に入る。もしかしたらこれは動くかもしれない。

ガンはリタを抱えたまま操縦席へと腰を落とす。

「ごめん、リタ。少しの間、我慢してくれ」

意識の無いリタをそつと後ろにあるもうひとつのシートに乗せて、シートベルトを締める。

「・・・・・・・・」

静かに操縦レバーを握る。しっくりとくる。いつものデカブツの感

覚だ。

「こいつなら、あいつらと」

戦える。あの蹂躪者共を追い払える。

「みてる」

ガンは静かにデカブツの起動ボタンを押す。

ブンと短く低い音が響き、操縦席の外部カバーが競り上がり、合着した。

まるでガンを飲み込むように、操縦席が軽い振動と共に動き、光を灯す。

デカブツが、ゆっくりと起動した。

「なんだ、なにがどうなった!!?」

『わかりません！ 本隊の応答がありません』

彼ら、蹂躪者達は混乱していた。先程までは確かに街中にいたはずだった。

街を破壊し、目標を捕獲する。彼らは「上」からの命令を着実に遂行していた。

だが、その目標の捕獲を開始した時、異変が起きた。突如、彼らは機体ごとこの謎の空間に移動していた。

薄暗い坑道らしき場所。下には古びたレールが幾重にも敷かれていた。長く暗い洞窟の世界。明かりは機体の光のみ。

「冗談ではないぞ」

隊長らしき男が呟いた。

「こんな世界から「遅れた世界」で妙な出来事に出くわすなどと」

この声は、機体越しのスピーカーには聞き取れない声だった。六機の部下達に、この後の呟きは届かない。

「もしも、戻れなかったら……ふざけるな、俺はこんな「ノフェス」のコックピットを棺桶にするつもりはない」

男は脅えた。この訳の解らない現象に。

恐怖。肝の小さな男にはたまらない恐怖。ほぼはったりだけで通してきた威張り散らす事が仕事のような男には、耐えられない恐怖。

そして、男は部下の言葉を聞きそびれていた。

『隊長。なにか音が聞こえませんか？』

「なに？」

男は再度部下の言葉を聞こうとした。

だが、次の瞬間

『!!!? アアツツ!!!!?』

その部下の真上の天井が崩れ、部下を呑み込んだ。

「……………あ」

男を含めた全員が、なにが起きたか解らず。呆けた声を漏らした。

もうもつと立ち込める暗闇の中の煙。

「!!!?」

その煙の中で何かが光り。キュイイと機械音をならし、男の方を向いた。

「なんだ」

煙が晴れていき、その姿を現す。

「なんだこれは!!!!?」

隊長の叫びと共に「それ」は巨大な姿を現した。

『と、トレース・アーム?』

「バカな! こんな馬鹿デカイト・Aがあつてたまるか!!!!?」

部下の呆けた言葉に男は怒声を浴びせた。しかし、この言葉は無意

識に自分にも投げ掛けていた。

こんな巨大な物があるわけがない。こんなのはおかしい。

しかし、目の前に「それ」は存在する。

動かしようの無い事実がそこにある。

それは男たちの乗る量産機「ノフェス」の倍。まるで幼児と大人程の開きがあった。

そのボディは頭部と胸部以外は恐ろしくバラバラに組み込まれており、継ぎはぎのスクラップ。まるでフランケンシュタインの怪物を想わせるアンバランスな機体。

その片腕には冗談と思いたくなるような何かがあった。それは巨大で先端が鋭利に尖っていた。何かを貫くための物に違いない。

その巨大な腕の先に、仲間のノフェスがいた。胸部を押さえつける形で地面に組み伏せられていた。

『く、そ。なんだ？』

部下のノフェスからの応答が男の耳に届く。

だが、その声はすぐに

『な、おい？ うあ、ウアアアツツ！！！？』

悲鳴へと変わり、男の、その他の部下にも届く。

ミシミシと金属がへしゃげる音が不気味に響き、断末魔の絶叫と同時に。

バキヤリ！ と、目の前のノフェスが巨大な腕に潰された。

巨大な頭部が男たちを見下ろす。

その目元はヘルメットを目深に被ったような出っぱりがあり、その口元は歯の噛み合わせのように合致したギザギザがあった。

その姿と瞬間の躊躇いの無い殺戮は、男たちには自分達を迎えに来た「死神」にしか見えなかった。

男の中で何かが切れ、狂ったように、部下達に命令を下した。

「撃てエエツツッ！ コックピットを狙え！ この化け物を、化け物を、やれええつつっ！！？」

男の号令と共に胸部にマシンガン式ライフルの弾が撃ち込まれた。

ガンは操縦席の中で荒く息を吐いていた。指が張り付いたように動かなかった。

やつらに対する怒り、街を破壊された、街のみんなを恐怖に落とした、大事な人たちを、自分の生きてきた世界の全てを蹂躪された怒り。その怒りに身を任せて、デカブツの腕に捉えていたやつらの機体を押し潰してしまった。いくらロボットの、レバー越しに感じる振動といえどもあまり気持ちのよい感触ではなかった。

「だけど、「操縦席」は外したよな？」

「胸部」に向かって潰したのだ。「操縦席」は無事のはずだ。運がよければ生きているはず。

自分はやつらのような人殺しにはなっていない。

少しばかりの自分に対する慰め、その時、やつらに動きがあった。こちらに向かつて攻撃を仕掛けてきた。

「こいつら、「胸」を集中的に。「動力部」狙いのつもりかよ！」

『敵機「コックピット」ほぼダメージありません！？』

「バカな！？ これだけの近距離、これだけの火力だぞ！？ 壊れないはずがないだろ！！？」

彼らの「胸部」への攻撃はデカブツには全く通用していなかった。

「そんなところ。そこは「空っぽ」なんだよ！」

「そんな、「コックピット」周りは頑丈だということか！？」

両者の「常識」にはずれがあった。

かたや、「コックピット」は「胸部」にあるという「常識」

かたや、「操縦席」は「胸部」では無いという「常識」

このずれが、ガンの知らない所で、初めての「人殺し」を起こしてしまった。

ガンは気付かない。エコーに存在するT・Aはこのデカブツのみ。

そのデカブツの操縦席は「首」にある。

そして、大人と幼児ほどの大きさの違い。この違いがガンの「常識」からの推測で「頭部」にあると思ひ込ませた。

そして男たち側も「常識」から「胸部」に存在するという固定概念から抜け出せずにいた。

「俺は、お前たちとは、違うんだ!!」

気づかぬままに、ガンは一機のノフェスの胸部に向けて、腕に装備された鋭利な突起物。本来ならば削岩に使用される「スパイク・アンカー」を打ち込んだ。

鋭く貫かれる鈍い金属の音と甲高い「スパイク・アンカー」の起動音が響き、一機のノフェスが胴体部を貫かれ、後方に消し飛んだ。完全に「コックピット」を狙ったこの一撃にその場にいた全員に絶望的な恐怖が走る。

——この化け物は俺達を殺すつもりだ!?

彼らは恐怖に駆られ、無茶苦茶な発砲をデカブツに対して開始した。

「こいつらっ!?!」

無茶苦茶な発砲は操縦席のある「首」にも命中する。だが、胸部と頭部に対しての発砲はダメージといえるダメージにはならなかった。だが

「11の!」

ガンは無意識に左腕で操縦席を庇ってしまった。ひとりであったな

らば、気にも止めなかったのかもしれない。しかし、操縦席にはまだ意識の戻らないリタもいる。それがガンの無意識に訴えてしまったのかもしれない。

たが、この無意識の庇いが、デカブツの弱点を露呈させてしまうことになってしまった。

左腕の継ぎ目にマシンガン弾が、着弾する。

「しまっ!？」

左腕の継ぎ目の一部が爆発し、装甲板が剥がれ落ちる。

「ふふ」

男が笑う。絶望から形勢逆転の光が見え、唇を歪ませ、瞳をギラつかせ酷い顔で笑う。

「勝てるぞ！ 継ぎ目を狙え！！ へハハ！ 腕にも、脚にも、狙い撃ちだ！！」

『ハッ!!!』

弾丸を継ぎ目に撃ち込むべく、四機のノフェスが先程よりも狙い定めた射撃を開始する。

「くっそうっ!!」

ガンは焦った。まだノフェス達の光明を見いだした嬉々とした攻撃は上手く継ぎ目には当たらずこちらに大したダメージは左腕以外には奇跡的に通ってはいないがそれも時間の問題といえた。

「ここは、逃げる!!」

ガンはデカブツの両脚を足下の二つのレールに乗せ、片手のサイドレバーを即座に切り替え、ペダルを全力で踏んだ。

『なっ!!』

デカブツの足下に強烈な火花が散り、巨体がつんざくような金属音と共に高スピードで後退を開始した。

デカブツの脚部に搭載されたトロツコロラーが力を発揮した瞬間であった。

「逃がすな追え!!」

ここで逃せばあの化け物を倒すチャンスが無くなる。男の叫びと共に四機のノフェスの背部に装備された飛空ユニットが展開し、デカブツの追撃を仕掛けた。

「クッ!!?」

スピードの上がったデカブツを執拗に飛空ユニットによる飛行速度の追撃にガンは唇を噛んだ。

逃げることで手一杯で、ノフェスの攻撃を被うことできない。このデカブツは兵器ではない。採掘機械とでも呼べるT・Aなのだ。射撃系武器など持ち合わせていない。あるのは腕に装備されたスパイク・アンカーのみ。しかし、これは隙が大きすぎる。外してしまえば、致命的となる。

「……………切れる」

ここにはリタもいるのだ。絶対に生き延びなければならない。ガンは祈りながら後退を続ける。

「タマアッ！ 早く切れるよっ！！」

この攻撃の手が緩むのを。祈って逃げるしかなかった。

「ゲウウツツ！？」

右腕の継ぎ目に攻撃が当たる。

「くそっ、くそおおっ！！」

続いて両脚に直撃し、爆発が連鎖で起こり、デカブツの巨体が揺れ、レールから崩れ落ちそうになる。

「ダメかよ、ダメなのかよおっ！！」

ガンの歯の奥がギリリとなり、機体のバランスを全力で取ろうとする。洪水のような火花が前方に散り、ノフェス達の攻撃の手が一瞬緩み、同時にデカブツが開けた場所に出た。

「まだ」

ガンの瞳に左の空洞部が見えた。

「諦めてたまるかああアツツ！！？」

瞬時に装甲板の殆ど外れた左腕を斜め横に突き出し、スパイク・ア

ンカーをワイヤーアタッチの開放で打ち込んだ。

左空洞部の真上にスパイクアンカーが打ち込まれ、高速でワイヤーが巻き戻されデカブツの巨体がレールから離れ、真横に飛んだ。

『逃すかつ!!』

だが、この思惑にいち早く気付いた一機のノフェスが腕部からトーチ・カッターを引き抜き、投げつける。

投げたトーチ・カッターがすれ違うデカブツの右脚の継ぎ目に直撃し、溶解、爆発する。

「そ、んな」

ガンは愕然とした。これでは、向こう側に着いても逃げる事が叶わない。このままでは終わってしまう。リタも、自分も。

（守れないのか俺は。この街を、みんなを、リタを）

巨体が岩壁にぶつかり、デカブツは大地に崩れ落ちた。

「ウハハハ！ 良くやったぞ！ よし、あの忌々しい両腕を破壊しパイロットを引きずり出すぞ。俺の手でぶち殺してやる!!」

男は酷い笑い声を挙げながら目の前の自分達に恐怖を与えた憎き化け物の元へと飛空ユニットを加速させ、急いだ。

（終わるのか？　こんなところで？）

ガンは小さく震えた。

（こいつならいけるって、みんな護れるって、息巻いて、これか？）

結局なんの力も無かった自分が許せなかった。先祖達の遺してくれた。受け継がれてきた鉱山という財産を傷付けてまで、抗った結果がこれだという事が許せなかった。

自分では何も護れない。街も、鉱山も、街のみんなも、親方もおかみさんも、ロロナもドンも。そして、リタも。

「ウアアアアツツッ！！」

ガンは叫んだ。近づいてくる蹂躪者ノフェス達をモニター越しに睨み付けながら、自分に怒りながら叫んだ。

もう、抗う術は本当に無いのか？

「・・・・・・・・・・ア」

その時、ガンの後ろで声が漏れた。

「リタ？」

リタが目を覚ましたのか？　ガンは前からでは見えないリタに意識を傾けた。

「ジ・・・・・・・・エル・・・・・・・・グ」

リタの唇から奇妙な言葉が漏れる。ガンには聞き取れない声で。ガンは耳を棲ます。それでも聞き取れない声でリタは呟き

「オル・・・・・・・・ギー・・・・・・・・ガ」

閉じた瞳を開く。その瞳は「深い」紫色。

崩れ落ちたデカブツに突如変化が起きる。ヘルメットを目深に被ったような出っぱりが縦に割れ、人という「こめかみ」の箇所に移動し、その下に隠された二つのカメラアイが露となる。そこから漏れ出す「紫色」の光が鈍く辺りを照らし、立ち上がるはずのない両の脚で立ち上がる。

「こいつ、まだ立ち上がれて!？」

男達は驚き、ライフルの銃口を目の前の存在に向ける。

「なんだ、何が起きたんだよ!？」

ガンはいま起きている事を出来なかった。立ち上がっている。デカブツが。自分は全く「操縦をしていない」のに。

デカブツの胸部が開く。そこは発掘された時からがらんとした空間だった。その後もなにも組み込んではいない。ただ、鉱石を運ぶ倉庫替わりにしていた部位。だが、いまは

「光?・・・・・・・・紫色?」

煌々と輝く「紫の光」がその全てを覆い尽くしていた。その輝きに一瞬、男達は目を奪われた。

だが、その一瞬のうちに

「
・
・
・
・
・
・
パクト」

男達はこの世から消し飛んだ。リタの最後の呟きと共に解き放たれた胸部の紫の光が男達のノフェスを呑み込んだのだ。

そして、**光は勢いを増し**

「アアアアアアアッッッッッッッ!?!?」

ガンとリタをも呑み込み

「な、なんだこれは！！」

「ぬあああつつ！！？」

鉦山を突き破り、エコーの街を我が物顔で飛行していた戦艦をも呑み込んだ。

エコーの住人はこの一筋の紫の光を見上げていた。誰ひとりとし

て、下を向いてるものはいなかった。

親方も、おかみさんも、ロロナも、ドンも見上げていた。

「綺麗だなあ」

先程まで怯えていたロロナはドンの首に抱きついたまま、素直な言葉の口を口に漏らした。

そして、この言葉から遅れること数秒。紫の光はこの「世界」から消えた。

発した者も共に。

「そうですか。ご苦労さまです」

報告を受けたオールバックの男は食事を中断し口元をナプキンで拭き、口の端を歪ませた。

「クク、〔取り残された世界〕から、〔気流〕も使わずに跳びま

したか」

そして手を叩いてこの場にいない者に賞賛の拍手を贈った。

「さすがです。しかして、あの世界で貴女は……今度は誰を「道連れ」に選んだのでしょうか。無意識のうちに、ねえ」

フォークでグラスを叩き、男は楽しそうに、とても楽しそうに笑った。

「「妖精の姫君」よ。必ず我が手に、戻ってきますよ。より美しく、恐ろしく、ねえ？　ねえ？　ク、ハハハハ……！」

男は高笑いを挙げながら白いシルクハットを目深に被り、自室を後にした。

目元に、「赤い」なにかをギラつかせながら。

「踊りましょう。大切なものを壊しながら、私と共に踊りましょう。逃げられません。ねえ？　軽やかに」

3・「巨人」く起動・咆光（後書き）

久方ぶりに書きました。矛盾だらけですけど楽しんで頂けたら嬉しいです。

4・「新」復讐者

「疲れている？」

夢。久しぶりに兄の夢を見た。死んでしまった兄の夢だ。ひどい夢だ。

「なんで……今になって」

寝起きの顔を手で拭いながら、昨日酔い覚ましに飲んだままのグラスの水を煽った。温い水だ。

「何かの暗示か？」

顎に手を当てて考える。その時、自室のドアが開いた。

「失礼しま、失礼しました！」

だが、入室してきた部下は慌てて部屋から出ていってしまったのだろっ？

「……ああ」

そういえば、私は寝間着を着ていない。下着姿というやつだ。やれやれ、酔った時の悪い癖だな。

「すまなかったなクリス。目に悪いものを見せてしまった」

私は服を着てから部下、クリスに入室してもらい。謝罪をした。

「いえ、その、隊長の寝起き姿は」

顔を真っ赤にして下を向くクリス。こんな姿をみると少々悪戯心が芽生えてしまう。これも悪い癖だな。

「姿は？ 魅力的だとも？」

「そ．．．．．はい」

「可愛い事を言う」

そつと抱き寄せて頬にキスをする。

「あ」

クリスは染まった頬に手を当てて声を漏らした。

いかな、好意を持たれている事はわかってるがこれはやり過ぎたかもしれんな。

「すまない」

「い、いえ」

「で、私になにか用かな？」

「あ、は、はい！ 上層部からの命令を伝えに参りました！」

「命令？」

「はい」

クリスは小脇に抱えた紙束の一枚を読み上げた。

「本日を以て、「スピリング少隊」の辺境警備任務を解任。続いて、「パープル・ハント」への参加を命ずる」

「………了解した。クリス、すまないが少し、部屋を出ていってこないか」

「はっ、失礼しました」

クリスは規律正しい敬礼と共に退室した。

「「パープル・ハント」か」

私の元にこの作戦が……。何の因果かな。

「あの「女」を」

こんな顔はクリスには見せられないな。酷く、醜いに違いない。

「この手で」

あの夢は予兆だったのかもしれない。

「消すときがきたか」

命令とはかけ離れるだろうが、「不可抗力」とは起こるもの。その後、知らない。

「テリー」をたぶらかしたあの「女」に、鉄槌を降す。

この私 「ハンク・ホールド」の手によって!!

4・「新」界賊

「世界」を移動する無謀な渡り鳥の集団がいた。様々な世界の宝を追いかける盗賊。「気流」の恐怖をもともしない命知らず達。

そんな彼らを人々は「界賊」と呼んだ。

そんな「界賊」達がここにもいる。

漆黒の闇、夜という時。星が散りばめられた空の世界。本来ならば静寂の世界。だが、今は違う。今宵の夜空は轟音と爆発の戦場だ。

『なめんな!!』

銃口からの一瞬の閃光、暴音。灰色の飛空ユニットをショット式ライフルの弾丸が貫く。

灰色のT・Aが空を暴れ、爆発する。

『お次は!!』

灰色のT・Aを仕留めたパイロットはコックピットの中で舌で唇を濡らし、操縦桿を強く握り、飛空ユニットの出力を上げて夜空の戦場を飛び回る。

この機体に握られた武装はショット式ライフル。特徴的な丸い頭部に吊り上げられた目のようなV字型のカメラアイ。手脚の長いシヤープなボデイライン。甲虫の背面を似せたような背部飛空ユニット

ト。

この機体の名は《トウヘル》 空戦に特化した量産T・Aだ。
本来ならば、撃ち落とされた機体と同じ灰色。周りを飛ぶ同型の《トウヘル》は確かに灰色である。

だが、この《トウヘル》の機体色は「ライトグリーン」左肩にはクワガタ虫を模した赤茶色のペインティング。

これは証。世界を渡る「界賊」の証明である。『油断してんじゃない！』

ライトグリーンの《トウヘル》が味方の《トウヘル》のピンチを助ける。

『すまねえミリイ！』

助けられた《トウヘル》からの通信が届く。その通信にパイロットは顔に掛かる長い金髪を揺らしながら一言返した。

『暇があつたらあいつらに弾ぶちこめ！！』

『応！！』

旋回し《トウヘル》同士が離れ、それぞれの空へと飛んでいく。

これは「界賊」同士のいさかいである。 敵意を剥き出しにした攻撃には攻撃で返す。利害の一致しない「界賊」同士の掟。避けられない戦いである。

『チツ、きりがないよ！』

ミリィア・マーフィ

界賊は舌打ちをした。

敵の数は残り十機。味方機は半分の五機。自機のライフル弾数は残り僅か、他の武装は手首に装備された「トーチ・カッター」のみ。おそらく残り四機の味方も同じ条件であろう。補給無しでの勝算は厳しいものがあつた。

（まだ《スタビトル》はあいつらの飛甲艦とドンパチだろうね）

《スタビトル》とはミリィの所属する界賊の飛甲艦の名前。現在、敵艦との交戦中。ミリィ達は離れていた二十機のT・Aの増援を食い止める為に、先行していた。

ここまでなんとか十機のT・Aを仕留める事に成功していたが、確実に限界が近づいていた。

しかし、それは相手も条件は同じといえた。奴らの操る機体は《ベツチエ》ミリィ達の《トウヘル》とは系列の近い機体である。違うのは真一文字のカメラアイとずんぐりとした手脚。武装も同じシヨット式ライフル。勝っているのは数だけだ。

「操縦テクならあたしらの方が上だよ！」

ミリィは叫び、《トウヘル》は急降下し、後方の《ベツチエ》を引き離す。

取り残された《ベツチエ》に味方の《トウヘル》の銃撃。
ベツチエ
敵はこれを下降回避する。

だが、そこに急降下したはずのミリィ機が急上昇し、アッパー気味に右腕が敵機のカメラアイにヒットする。その手にはトーチ・カ

ッター。

火花を挙げて突き刺さる。敵機^{ベッチェ}が弾かれたようにきりもみ回転し、自由を奪われる。そこに容赦の無い味方^{トゥヘル}の銃撃。敵機^{ベッチェ}は爆音と炎を上げて夜空に散った。

「あたしのケツを追いかけたバツさ」

ミリイは捨て台詞を吐いて夜空を飛ぶ。

（残りは、九機！！）

残る敵^{ベッチェ}に迎いミリイ達の《トゥヘル》が突撃を開始する。
一気に片を付ける。そのつもりの突撃だった。

だが、そんなミリイ達の前に

『！！！？』

厚い雲を切り裂いて、巨大な黒い飛甲艦がその姿を現した。
ミリイ達の《スタビトル》では無い。敵の飛甲艦だ。

「絶望」の二文字

『来た！！』とミリイが叫ぶ。

「絶望」の二文字？ それは否である。

敵の黒い飛甲艦は所々から煙を上げ、よろめいた蛇飛行をしている。
間を置かずの後方からもう一隻の飛甲艦が姿を現した。

前方をゆく黒い飛甲艦ゆり一回り小さいが、その外観は誰の目にも焼き付く奇抜なフォルムだった。

敵の飛甲艦が無骨な黒色、ゴツゴツした海を渡る艦と大差の無いデザインに対して、この飛甲艦は色こそ錆に似た赤茶色と地味目だが、艦主部に対となる謎の巨大武装。まるでそれはクワガタ虫の特征的な上顎のように見えた。両隣にもやはり対となるレンズが二つ。下腹部には四本の巨大アームがしまいこまれ、その外観はまさに密林に潜む甲虫の王者の一角、クワガタ虫のようであった。

そして、ミリイの《トウヘル》に施された青いペインティングが挿す通り、この飛甲艦こそ、ミリイ達の牙城であり、帰るべき家でもある界賊飛甲艦。

《スタビトル》である。

『頭の出陣だ！ 派手に撃ち上げろ！！』

ミリイ達の通信機に低くしかしよく通る声が響く。

『頭が、出るの！？』

ミリイは驚き、《スタビトル》を見た。

ミリイ達の頭目は滅多に戦場には出ない。しかし、仲間のピンチには自ら出陣をする。つまり、今はミリイ達の状態をピンチと判断したという事か。

《スタビトル》の甲板の一部がせり上がり、「ダークブルー」の《トウヘル》がその姿を現した。

その姿は丸い頭部とシャープなボディラインは他の《トウヘル》と同じである。しかし、その手脚は他の《トウヘル》よりもずっと小さく長細かった。握られたショット式ライフルもこの手のマニキュレーターに合わせて作られた特注品であるようだ。長細い脚は機体重量を支えられないのか正座のような形で折り畳まれていた。

それに反比例するかのように背部の飛空ユニットは一回り肥大化しており、まるでナツプサックを背負っているようだ。

コックピット内。トレス・グリッブ操縦桿をトンと叩き、握りしめる。パイロットである頭目の切れ長の目がゆっくりと開き、黒と青の疎らに染め上げられた髪が揺れる。

ダークブルーの《トウヘル》がゆっくりと中空に浮かぶ、折り畳まれた量脚が開いてゆき、脚先にある二つのトーチ・カッターが露になる。最初からこの脚は立ち上がる為に付けられた物ではなかったのだ。攻撃的に突き刺し、切り裂くための脚だ。その姿は吊り目気味のV字カメラアイと合わさると青いテナガバチのようである。

《スタビトル》の両端の装甲がスライドし、ミサイルポッドが現れる。

ダークブルーの《トウヘル》の頭部が持ち上がり、V字型のカメラアイが鈍く光る。

『撃ち込めえっ!!』

二つのミサイルが前方に撃ち込まれる。それを合図にするように頭目はグリッブに力を込め、愛機の名を叫んだ。

『行くよ、《フランナ》！！』

背部飛空ユニットが力強い光を放ち、弾丸の如く《フランナ》が飛び上がった。

ドゴオオッ！ 二つのミサイルが敵飛甲艦に直撃し、荒れ狂う炎が噴き上がり、爆発する。近くにいた敵機^{ベッチェ}が捲き込まれ、ぶつかり、三機の《ベッチェ》がまるで玩具のように回転し夜空の塵となった。

蓄積されたダメージが飛甲艦の船体を真つ二つにし、炎の塊となって墜ちていった。

取り残された五機の《ベッチェ》が、母艦の轟沈を目の前にし、一機が戦線を離脱しようと動き出す。

だが、それよりも先にひとつの弾丸が、この機のコックピットを正確に射抜いた。敵機^{ベッチェ}がガクンと一瞬震えるような動きをし、重力に引かれる自由落下を始めた。

ジャコン！ と鈍い音がショット式ライフルから響く。高度からの狙撃。ダークブルーの機体が月光の元、妖しく光る。細長い両手脚^{ベッチェ}が敵機に潜在的な恐怖を与える。

コックピットの中で、頭目「コートニー・タウス」が冷徹な瞳を彼らに向ける。

『そちらから仕掛けて来た「戦争」だよ？ 逃げられるとは思わないことだね』

冷徹な第二射目を敵機に向ける。

だが

『二機、いない』

標的を付けたスコープ映像の中に映り込むは二機。残る敵は四機だ。二機足りない。逃してしまったのか？

『それは、無い！！』

コートニーが操縦桿を強く握り、フットペダルを慣らす。《フランダ》の飛空ユニットが強い光を放ち、アクロバティックに機体が一回転する。後方から迫る敵機^{ベッチェ}が確認される。脚部のトーチ・カッターが光り、そのまま左脚がカメラアイ、右脚が肩部に突き刺さる。突き刺さった部分から火花が散り、溶解熱を送り込む。

『なかなか良い考えた。けど』

至近距離からコックピットに向けてショット式ライフルの弾が撃ち込まれ《ベッチェ》が仰け反り、カメラアイからトーチ・カッターが引き抜かれ勢いが付いたまま肩部に刺さったトーチ・カッターが敵機^{ベッチェ}の片腕を焼き斬り踊るように中空を舞った。

『アタシには届かない』

V字カメラアイが鈍く光る。恐らく、目の前の《ベッチェ》のパイロットは絶望的な表情を浮かべている事であろう。だが、そんなものはコートニーには関係無い。ただ冷酷に

『さようなら』

撃ち貫く。

短い爆発音。合計十八機の《ベツチエ》が夜空の闇に消えていく。残りは二機。

その二機が、武装を放り出し、急降下を始める。明らかな敗走。完全な戦闘意欲の喪失。

『言つたろ？ 逃がさないと』

《フランナ》も急降下を始める。この場から逃がす事など微塵も考えてはいない。ただ、ただ、最後のひとりまで倒すのみ。

『アタシの家族に手を出したあんたらは、ここで終わるしか道は無いのさ』

戦場は深い密林の大地。「ドウードの森」に移る。

二機の《ベツチエ》は限界を超えた降下から、即座に進路を取ってドウードの森の上空を飛んだ。逃げる。どこまでも、だがしかし、青き追撃者はそれを許しはしない。軽量化の施された《フランナ》と元々の《トウヘル》よりも重いノーマルの《ベツチエ》では、この敗走劇は意味を為さないものとなっていた。

一機の《ベツチエ》はなぶられるように両手脚、頭部が後方からの射撃で、撃ち貫かれ、残された胴体部はトーチ・カッターの溶解

熱で完全に切断され森へと墜ちた。

残る最後の《ベツチエ》は、背部飛空ユニットにトーチ・カッターが突き刺さり、《フランナ》の重量が《ベツチエ》へと掛かり、火花を散らしながら、森へと墜ち、ダイレクトにコックピットに伝わるトーチ・カッターの溶解熱で、その活動を停止した。

《フランナ》のトーチ・カッターが引き抜かれ、ドロリと溶けた鉄が木々を燃やした。

『まったく、つまらない戦争だったよ』

本当に、つまらなそうに、コートニーは《フランナ》を空中で静止させ、辺りを見回した。

『勝手な襲撃、勝手な終幕。本当に自分勝手な阿呆共だった。アタシの大事な家族を傷つけたただけだ』

やっていられない愚痴を溢しながら、コートニーは家族達の迎えを待った。なにか、収穫でもなければ割りに合わない。しかし、敵の物資は全部吹き飛ばしてしまった。コートニー自身の命令で、飛甲艦を沈めてしまった。収穫など期待も望めない。

『????????? なんだいあれは?』

不意に映った外の映像をコートニーはズームにした。

『樹が、あの部分だけ倒れている?』

何故気付かなかったのだろうか？ コートニーは《フランナ》をその場所まで、移動させた。

『こいつは……………』

空中から、それを眺めた時、コートニーは啞然とし

『……………いいねえ』

初めてその口に笑みを浮かべた。同時に、《スタビトル》からの通信が入る。

『頭、大丈夫か？』

『バカ兄貴！ 頭なら大丈夫に決まってるだろ？ あたしらの頭なんだからさ』

『一応、聞いとくもんだろ？ なあ、頭？』

楽しいミリイとゼスの兄弟喧嘩が聞こえてくる。コートニーはそれを大きな声で笑った。

『頭？』突然の笑い声に、心配気な声が耳に届く。

『ごめんごめん。アタシは大丈夫さ。それよりも早くこっちに来てほしいね』

『了解!』

『あたしが先行して迎えに行く!!』

『おい待てミリィ! お前の機体は整備始めたばっかだろうが!!』

『はん! 《カイト》でもなんでも使って行くんだよ!!』

『いいから、大人しくしてろ!!』

『な——』

ブツンと、賑やかな通信を一旦切って、コートニーはもう一度目の前に映るものをじつくりと眺めた。

『こんなのは初めてだ。間違いなくお宝だよ』

笑みを抑えきれないコートニーの《フランナ》の下に、木々を枕にして横たわる存在。

それは継ぎはぎな手脚を持つ一機の「巨人」だった。

——最高に、楽しみだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1789j/>

～ ギー・ガ～

2010年10月17日01時50分発行